

219
412

國分美佐子著

女子國文讀本参考書

東京書林 青銅堂藏版

081827-000-1

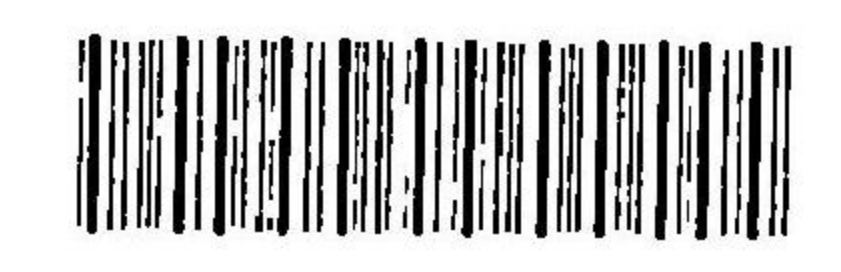
特26-579

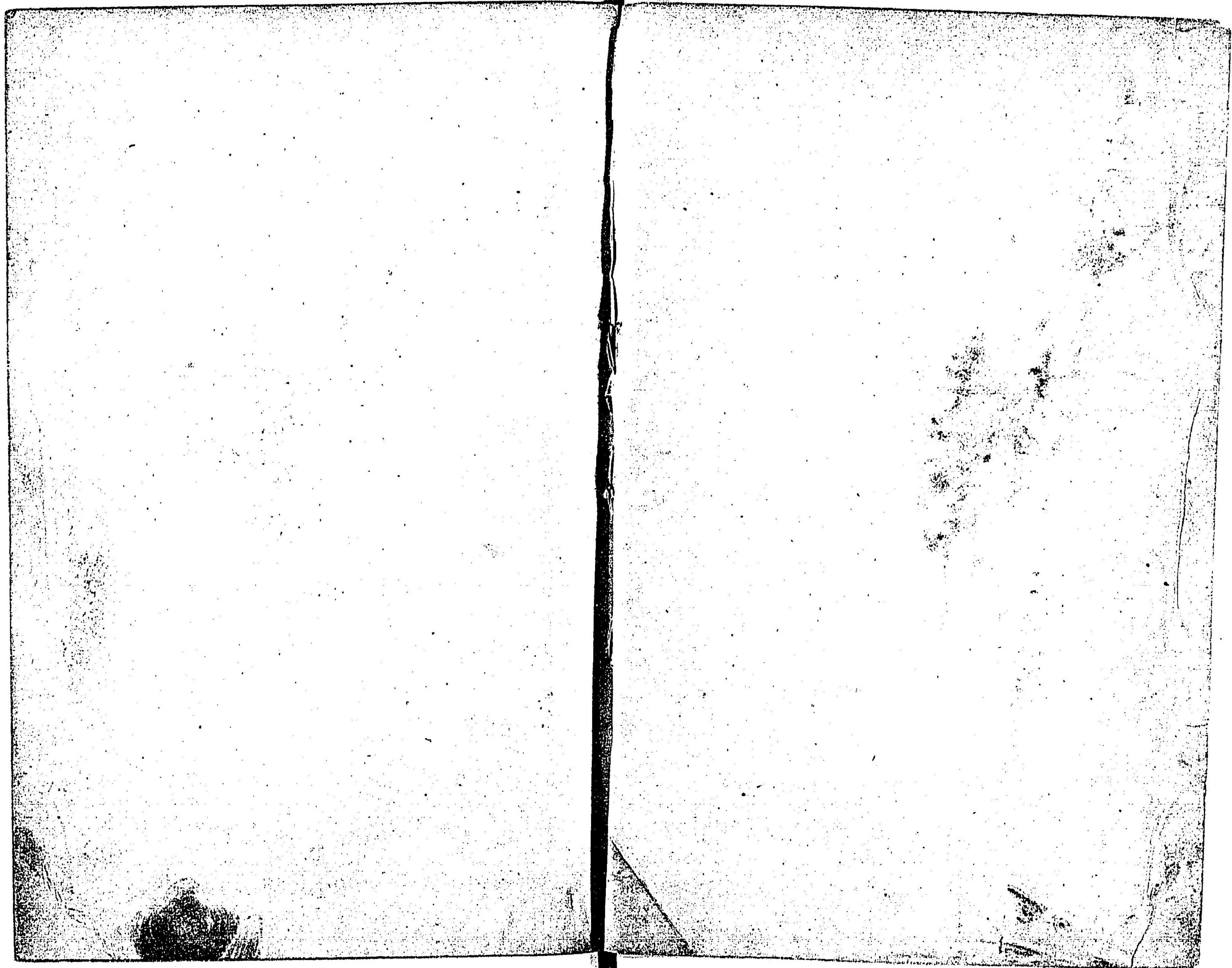
女子國文讀本参考書

國分 美佐子 / 著

M34

DAC-6712





女子國文讀本參考書

作者略傳

字は柳體鳩巢と號す。木下順巷の門人なり。正徳元年新井君美の薦を以て、幕府の學官となる。後脚を駿河臺に賜はりしを以て世呼びて駿臺先生といふ。享保十九年歿す。年七十七。

秦 鼎

橋南谿

南谿は醫を業とす。名は春暉、字は惠風、俗姓は宮川梅仙と號す。南谿は其の別號、伊勢の人なり。生れて七歳、父孟子を讀む。南谿適、傍に在り。父語るに、羊を以て、牛に代ふるの章を以てす。南谿默して其の義を了す。父之を奇とし、教ふるに文學醫術を以てす。長ずるに及びて、業大に進む。後朝に仕へて尙藥に補し、石見介に任せらる。嘗て東西に漫遊して、聞見を



弘む。足跡天下に周し。文化二年歿す。

那珂通高

盛岡の藩士にして、元、江幡五郎と稱し、頼三樹、吉田松陰等と交り、國事に奔走せる勤王家なり。維新の後、大藏文部二省に歴仕し、古事類苑を編修す。未、成らずして、明治十二年歿す。年五十二。

貝原益軒

名は篤信、字は子誠、益軒は其の號、久兵衛と稱す。筑前の人、世世福岡侯に仕ふ。益軒好みて書を著はし、人を利し、物を濟ふを以て要となす。其の撰著する處、百余種に及ぶ。又、好みて奇勝名區を探り、足跡幾んど天下に遍ねし。其の行程勝迹は、悉之を記して公にし、以て旅人に便にす。老に及びて、瞶、饑衰へず。藩の三侯に歴仕して、禮遇優渥、累りに食邑を加へらる。元祿年間、骸骨を乞ひて、京師に隠居せしが、藩猶俸祿を賜ひき。正徳四年歿す。年八十五。

松平定信

田安宗武の七子にして、出でて白川の城主松平定邦の嗣となる。安永四年閏十一月、從五位下に叙し、上總介と稱す。天明三年封を繼ぎて、越中守に任せられ、從四位下に進む。定信深く學を好み、兼ねて和歌及書に巧なり。其の老職にあるや、賢に任じ、能を使ひ、財用を節

省し、碩儒を擢用し、日夜治法を講習す。故を以て、寛政の初政、粲然觀るべし。寛政五年職を免じ、左近衛權少將に任せらる。文化九年致仕して、樂翁と稱す。文政十二年卒す。年七十二。

太田南畝

名は覃一、字は子耕、南畝は其の號、蜀山人、杏花園、狂哥堂等の別號あり。直二郎と稱し、後、七左衛門と更む。幕府の士なり。學を好み、文を善くし、傍遊戯國歌を作る。滑稽談、村老野嫗と雖も、抱腹絶倒せざるなし。世の所謂蜀山人先生是なり。文政六年歿す。歳七十五。

中村正直

敬字と號す。始、鶴鳴、梧山等の號あり。天保三年江戸に生る。嘉永元年、昌平坂學問所寄宿寮に入り、安政二年、學問所教授方となり、甲府徴典館の學頭となる。慶應二年、英吉利へ留學を命せられ、明治元年歸朝す。同十年、東京大學文學科教授となり、十七年、東京大學教授に任せられ、二十一年、文學博士の學位を賜はり、二十三年、女子高等師範學校長に兼任し、翌年卒す。年六十。曾、小石川に同人社と云へる。一大家塾を開く。全國の子弟、東京に遊學する者、争ひて入學せり。著譯の書、亦多し。

中村惕齋

名は之欽、字は敬甫、七左衛門と稱す。後、仲二郎と改む。惕齋は其の號、平安の儒者なり。性篤

質、浮靡を好まず。市井の喧器を厭ひて、幽地に遷居し、專文學を事とし、泛交を爲さず。博學洽聞、當時伊藤仁齋と名を齊うす。著書頗多し。元祿十五年歿す。年七十四。

柳澤淇園

和州郡山藩の老臣にして、貴戚なり。名は里恭、字は公美。淇園はその號。竹溪又玉桂の號あり。才文武を兼ね、旁佛典醫藥、音律、書畫、篆刻に通じ、凡百の技藝、精を究めざるなし。人と爲り、磊落不羈にして、客を好む。寶曆八年歿す。年五十三。

徳川吉宗

和歌山の城主、光貞の第三子、貞享元年和歌山城に生る。將軍家繼の薨するに及び、諸老議して、迎へて將軍と爲さんとす。吉宗固辞すれども、聽かれず。遂に立つ。八代將軍これなり。天資聰明、博く民物を受す。性深く學を好み、登職に及びて、屢名儒碩學を延き、經史を講論せしめ、精を勵まし、始を圖り、節儉を以て下を率ひしかば、前世僭奢の風、渙然として革まるに至れり。世稱して、徳川氏中興の英主とす。寶曆元年薨す。

松崎白圭

觀瀾と號し、江戸の儒者なり。名は堯臣、字は子允、左吉と稱す。篠山侯に仕へ、侍臣の長となる。常に讜言を進め、勤學を勸む。然れども、妬者嬖人に忌まれ、遂に致仕す。白圭少き時、中野

擣謙に従ひ、後、京師に行きて、伊藤東涯に師事す。又江都に來り、數物徂徠を見、又陽明學を學ぶ。後、其の非を悟り、書を作りて、諸家の要、及短長を論じ、名けて正言といふ。寶曆三年江都に歿す。年七十二。

成島柳北

初の名は温、字は叔厲、確堂と號す。後名を弘、字を保民と改む。天保八年生る。その家都城柳原の北に在るを以て、因て又柳北と號す。家定及び家茂二公の侍講に蔭補し、奥儒者に除せられ、布衣班に進む。夙に歐州の文物を慕ひ、幕吏と相容れず。官軍江戸城に入るに及びて、決然骸骨を乞ひ、學舎を設けて、子弟に教授す。既にして、歐米諸洲を歴遊し、歸りて朝野新聞を督す。才名大に著はる。明治十七年病で歿す。

富士谷御杖

成章の男、北野と號す。通稱は源吾、又專右衛門、初の名は成壽、又成元と云ふ。後、御杖と改む。和歌國學を父に受けて、家聲を落さず。世に鳴る。文政六年歿す。年五十六。

曲亭馬琴

瀧澤氏、名は解、字は瑣吉、小名は倉藏、後、清左衛門と改め、晩に剃髮して、篋民と稱し、曲亭馬琴と號す。明和六年、江戸深川に生る。幼にして、稗史野乘を喜び、晝夜手に卷を釋てず。後、醫

を學び、又經を龜田朋齋に受く、皆終へずして罷む。乃、稗史小説を以て、聲名を博せむと欲し、爾來筆硯を事とす。文辭絶妙、引證精博なるを以て、海内馬琴の書を讀まざる者なし、著す所、無慮二百五十余种に至る。嘉永元年歿す、年八十二。

篠崎 東海

江戸の儒者なり、本性は平、名は維章、字は子文、元文五年歿す、根岸善性寺に葬る。

加茂 季鷹

京都加茂の祠官、山本氏、正四位下、安房守に任せられ、雲錦亭と號す。和歌に巧にして、名海内に顯る。天保十三年歿す、年九十一。

三浦 安貞

豊後杵築の人、名は晋、梅園と號す。幼にして學を好み、十七歳の時、豊前の中津に赴き、藤貞一の門に學び、大に得る所あり、其の説高尚深遠にして、容易に解し得べからずといふ。寛政元年歿す、年六十七。

新井 白石

名は君美、字は在中、白石は其の號、明曆三年江戸に生る。家宣の立ちて將軍となるや、文學を以て、殿中に給事す。正徳元年從五位下に叙せられ、筑後守となる。老年に及び、門を閉ぢ

て、客を謝し、日夜典籍を以て樂とす。享保十年歿す、年六十九。

近藤 芳樹

晋一郎と稱し、寄居子菴と號す。初は田中源吾と稱す。周防の人、歌を善くし、著書十數種あり。明治十三年歿す、年八十。

萩生 茂卿

本姓は物部、名は雙松、惣右衛門と稱し、徂徠と號す。又、護國、赤城翁とも云へり。寛文六年生る。徂徠才學共に高く、最經濟に長じ、又、百家の書に精し。享保十三年歿す、年六十三。芝三田長松寺に葬る。

鈴木 正長

下野黒羽の城主、大關氏の執政たり。享保十七年、天下大に飢ゑ、路に餓孚多し。正長諸術を以て、救濟の法を行ふ。故を以て、封内一人の饑者なかりき。著す所、農諭一卷あり。今尙世に傳はれり。

税所 敦子

京都の人、林氏、年二十、薩摩の藩士、税所篤之が後妻となれり。廿八にして夫を亡ひ、翌年鹿兒島に赴く。姑に事へて至孝なり。藩侯久光の女、近衛忠房に嫁するや、敦子従ひて之に侍

せり。明治八年召されて掌侍に任せらる。全卅三年二月歿す。年七十六。卒するの日、特に正五位を授けらる。幼より和歌を善くし、家集御垣の下草あり。

鈴木牧之

鈴木牧之は、北越鹽澤の老農にして、性文雅を嗜み、よく節儉を尚ひ、誦讀を經營の中に絶たず、鉛槧を會計の餘に務め、以て遠近の墨客に交りたる人なり。

神澤貞幹

通稱は與兵衛、其甥、又、吐口とも號せり。大坂の人、雜學者にして、俳諧をよくし、詩文にも長けたり。寛政七年卒す。年八十六。

平田篤胤

幼名は正名、通稱は大角、大壑、又、氣吹廼舎と號す。安永五年出羽久保田の城下に邸に生る。文化八年駿河に赴き、古史成文を撰す。既にして江戸に歸り、專著書に従事せり。天保十四年秋田に歸るや、病に罹り、日に篤くして終に起たず。閏九月を以て歿す。時に歳六十八。篤胤古學を以て、名を一世に轟かし、其の著書百餘部に至り、門人の多き、千餘人に達せりと云ふ。

菅茶山

名は晋卿、字は禮卿、太沖と稱す。備後神邊の儒者なり。少き時、京師に學び、歸りて郷里に教授す。山陽・南海諸國の子弟、率ね茶山に就きて學ぶ。その曾て東遊するや、諸侯争ひて延見し、昌平覺の儒官より、諸藩の儒雅に至るまで、交を結ばざる者なかりき。文政十年卒す。年八十。

齋藤彦麿

通稱は可憐、葦假庵、又、宮川舎と號せり。石州濱田の城主、周防守の藩士にして、明和五年に生る。幼時江戸に來り、濱町の藩邸に住めり。學を伊勢貞丈・本居宣長に受け、傍、山東・京傳につきて、其の文筆を磨きぬ。天保年間藩主事ありて、奥州棚倉に徙さるるに及び、彦麿も從ひ徙れり。安政元年享年八十七にて歿す。

太田錦城

名は元貞、字は公幹、錦城は其の號、才佐と稱す。加賀大聖寺の儒者なり。學問淵博、百家の書讀まざるなし、而して最、經術に長じ、考據に密なり。遂に自、一家の學を建つ。所謂折衷學之なり。文政八年江戸に歿す。年六十一。

太田道灌

相摸の人、資清の子、初の名は資雄、小字は鶴千代、幼にして雄偉、能く文を屬す。後持資と稱

し源六郎と改む。兵馬佐徳の間に馳驅して、勇名を擧げ、然かも又和歌に巧なり。文明十八年上杉定正の殺す所となる。時に年五十五。

松尾芭蕉

名は宗房、初金作と稱し、後甚七郎と更め、最後に忠左衛門と稱す。桃青・風蘿・釣月・羊角等の數號あり。伊賀の人、津侯に仕ふ俳諧を好み、北村季吟に學ぶ。夙に遜世の志あり、去りて甲斐・駿河の間に歴遊す。後鹿兒島に遊び、大和を廻り、陸奥に往く。貞享七年伊賀に在り、大坂を経て、將に南都に趣かんとせしに、適病みて大坂に歿せり。年五十一。

清水濱臣

安永五年江戸に生る。姓は藤原氏、通稱を玄長といふ。泊泊舎、又月齋と號す。家世醫を業とせしも、性和歌を好み、文筆を事とす。濱臣思想高妙にして、博聞強記なりしかば、平門の巨擘と稱せらるに至れり。後遂に一家を爲しぬ。文政七年歿す。年四十九。

藤井高尙

備中吉備津宮の祠官にして、正五位下長門守に叙任せらる。鈴門に其の名高く、殊に物語を研究し、頗る文章に堪能なり。常に文詞軌範の書を著はして、教示す。從學の徒甚多し。天保十二年歿す。年七十七。松舎と號す。諡して三寸鏡靈神と云ふ。

石川依平

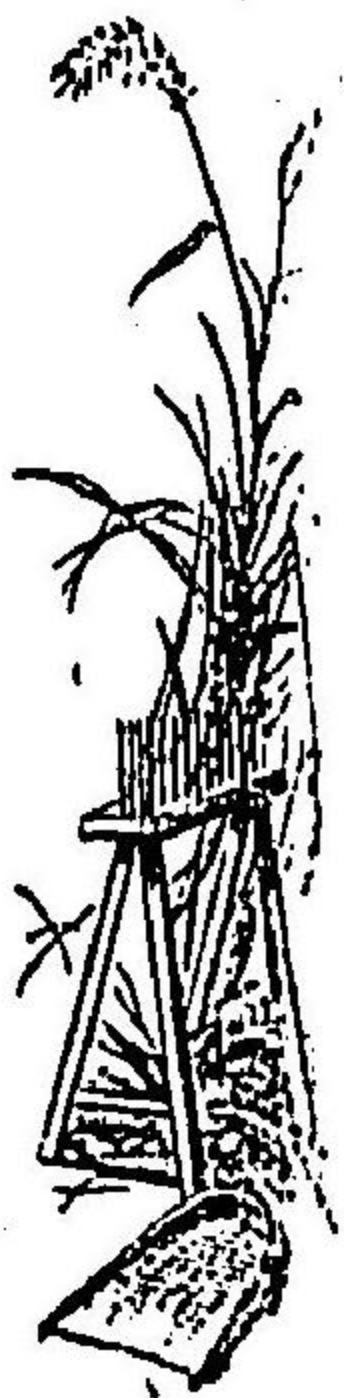
初の名は方救、通稱は爲藏、後惣大夫と改む。柳園また樞か本と號す。遠州佐野那の農夫なり。幼にして歌を能くす。初冷泉爲章に學び、後栗田土滿の門に入り、聲名大に揚る。安政六年卒す。歳六十九。

香川景樹

因幡鳥取の人なり。荒井氏の子。明和五年を以て生れ、小字を銀之助と曰ふ。景樹生れて僅に三歳、善く文を讀み、書を寫す。父母よりて鍾愛す。後京師に出でて、香川景柄の養子となる。近世和歌の大家なり。寛政八年從六位下に叙せられ、陸奥介に任せらる。後長門介と改む。天保十二年叙爵せられ、尋で肥後守に遷り、十四年卒す。享年七十六。

内山眞弓

聚芳園と號す。信濃の和學者にして、江戸に寓す。桂園の門人なり。嘉永五年歿す。年六十五。



引用書解題

雨窓閑話

古今の雑話を集録せる書にして、著者の名詳ならず。毎條の終には、必勸戒の語を附記せり。その言公正、その意切實なり。嘉永四年河田與の序あれば、此の頃の書なるべし。

北越雪譜

鈴木牧之の著にして、北越の雪に關する事を詳説圖解したるものなり。江戸京山人百樹が、著者の囑によりて、剛定發行せしものなり。

國史眼

本邦歴史にして、重野安繹、星野恒爾博士の撰にかゝる。

源平盛衰記

二條院の應保年中より、安徳天皇の壽永に至るまで、凡二十余年間に於ける、源平盛衰の事實を、百數十項に分ちて、詳述したるものにして、すべて四十八卷あり。鎌倉時代の歴史體文學として、歴史上にも、又文學上にも、貴ばるゝものなり。普通には、葉室大納言時長の作なりと稱すれども、その説確ならず。

平家物語

平治物語の後を受け、二十余年間の治亂を録せるものなれど、附會粉飾の點は、保元物語平治物語にも勝れりといふべし。本書の事實は、盛衰記と粗ば似たり。故に、同書より採撰したるものなりとの説あり。又、一説には、盛衰記こそ却て本書を本とし、事實をや、精確にし、敷衍をもしたる者なれ。平家物語の方、却て古色ありなといふ説もあり。その句調の流暢なるは、樂器に合せて語るために、ことごとく、句調を和めたるものなるべし。徒然草には、信濃前司行長の作と記したれども、詳ならず。

神皇正統記

神系皇統によりて、其の御事歴を記したるものにて、神代に起り、後村上天皇踐祚の條に終れり。群書類従本の奥書に、此の記は、延元四年秋成る。童蒙に示す爲に、老筆を馳する所なりとあり。又、櫻雲記には、興國元年に成れる由を記せり。北畠親房の著す所、文辭嚴正にして犯すべからず。具に事物の成敗を論じて、苟も曲ぐる所無し。親房は、乱世に處して、五朝に歴事し、文武の功頗る多し。本書の外、著書數卷あり。正平九年賀名生に薨す。

太平記

花園天皇の文保二年より、後村上天皇の正平二十二年に至る、凡五十年間の戦亂を記したる書なり。普通北畠玄惠の作なりと云ひ傳ふれど、太平記編纂由来書によれば、卷によ

りて作者を異にし、鎌倉大草紙・太平記批判記等は、撰者の事を云はずして、だゞ、母氏歿後凡、五十年後の作なりと云へり。近年の研究にては、洞院公定の日記に基きて、小島法師の作なりとすれども、其の傳詳ならず。本書の文勢は、壯大雄偉にして、巧に和歌漢文、及佛語を混和し、特種の筆力を有して、諸物語中に斬然頭角を顯はす、叙事の妙は、盛衰記に下らず。また彼の藩翰譜と相伯仲せり。

今昔物語語

源隆國の著、和漢古今の雑話を集録せるものにて、其の文平易流暢なり。今昔物語といふは、一條毎に「今は昔」と書き出せるによりてなり。或は宇治大納言物語ともいふ。隆國は、後一條・後冷泉二帝に歴仕せし人、曾、宇治の別荘にあり、往來の人を招きて、種種の談話をなさしめて、此の書を作れりといふ。承應元年歿す。

古今著聞集

橘成季の著にして、二十卷あり。政教文藝雜事に關して、著しき傳話を記せり。建長六年の自序あり。元祿三年上梓す。

増鏡

著者未詳、十卷あり。後鳥羽院の御治世より、後醍醐天皇の元弘三年までの事を記せり。世

に水鏡・大鏡と併せて、三鏡と稱す。著者を一條兼良ともいひ、また、同冬良とも種々説われど、伴信友の比古婆衣にはたゞ、南北朝頃の作なるべしと云へるのみ。

曾我物語

著者未詳、後鳥羽天皇の建久四年五月、源頼朝が富士野に收狩せる時、曾我兄弟が、父の仇工藤祐經を斫りし始末を記せり。正保三年の出版にして、十卷あり。

方丈記

鴨長明、日野の外山に閑居せる時、年來見聞せし事を書き綴りたる隨筆なり。その書名は卷末に住居のさまを云へる條に、「その家のありさま、世の常にも似ず、廣さは僅に方丈、高さは七尺のうちなり」とあるにとれり。順徳天皇の建保中の作なるべしといふ。詞づかひは、古雅に過ぎず、借偏に流れず、文は雄壯奔逸の氣に富み、厭世の趣充てりと雖、柔弱の跡なし。

十訓抄

著者未詳、三卷あり、今昔物語に倣ひて、種種の古語を集め、之を十訓の下に分類せり。建長四年壬子神無月半の比といふ自序あれども、名を記さず。

徒然草

吉田兼好の隨筆にして、凡二百四十三段より成れり。其の文章の俊逸なるため、其の意義の深奥なる爲め、是は註釋評論せるとの極めて多し。その上巻は、建武三年より以前に書きたるものなるべく、下巻は、此年の夏より後に書きたるものならんと云ふ。

土佐日記

紀貫之の著、承平四年の冬土佐の國より任滿ちて海路京に歸るときの日記にして、古來、その文の簡雅なるを以て稱せらる。當時、日記は漢語もて書き、仮名文は、專、女の書くもの様なりしかば、殊に卷首に「を」とこのすてふ日記といふものを、女もしてみんとてするなり」と云ふに筆を起して、女の作に、撰して記せり。

枕草紙

清少納言が、其の見聞毀譽褒貶を、隨心隨手漫録せるものなり。長短すべて百七十五段、和歌も全編に、凡三十六首あり。古くは清少納言記と記ししを、後人が枕の草子とは命じたりといふ。其の文辭才氣溢れ、又、獨特の長所あり。註釋の書甚だ多し。

明倫歌集

徳川齊昭の撰ふ所にして、倫理に關する、古今の和歌を類集したるものなり。凡そ一千餘首を收む。嘉永四年の自序、文久元年源頼位の跋、其の臣吉田尙徳の跋等ありて、同二年出版せり。

女子國文讀本參考書

一之卷

國分みさ子著

○一頁 草味 世の開闢に當り、事物の未、
○二行 分明ならざる時をいふ。 ○三 大八洲國 書紀にては淡路洲、大日本豊

洲、越洲、大洲、吉備子洲となし、古事記には淡道之穂之狹別島、伊豫之
二名島、隠岐之三名島、筑紫島、伊伎嶋、津嶋、佐度嶋、大倭豊秋津島とせり。 ○全 三人の
御子 大日靈尊、月讀尊、素戔嗚尊の三神。 ○三 三種の神器 八咫の鏡、天叢雲の劍、八咫瓊の曲玉の三
に授け給ひし神寶にして、天皇

の天、日嗣を知らしめす御璽とす。 ○四 豊葦原の瑞穂の國 天神の御代に、高天原
葦原、中國といへり。豊といふ言の添ひたるは、始て御子、命に事依さし賜ふ詔なれば、祝ぎ
てなり。瑞は水にて、借字なり。そのみづみづしさを云ふ。穂は稻穂なり。長く久しく、御子命の

此の水穂を所聞べき國と云ふ。 ○五 寶祚 天皇の 〇三 天孫 瓊瓊杵の尊をいふ。天
意を以て名けたる國號なり。 〇四 同 獵獺 勢力の熾盛 〇七 頭八咫鳥 咫は大指と小指
す。 〇七 恢弘 ひろ 〇四 同 獵獺 なること 〇七 頭八咫鳥 咫は大指と小指

す。 〇七 恢弘 ひろ 〇四 同 獵獺 なること 〇七 頭八咫鳥 咫は大指と小指

云ふ。これは頭の幾あたまもある、大なる鳥をいふ。古事紀傳には、八咫鳥は、八頭鳥にて頭の八つある由いへり。八咫は借り字なり。八は必しも、七八の八に限らずして、幾箇もあるをも云へり。古事紀序には、
○九 御弓の弮 神武天皇の持たせ給ふ御弓の弮なり。はずとは弓の兩端の弓弦を懸くる處をいふ

○七 五穀 米・麥・粟・黍・豆の五つの稱にして、穀類の總稱に用ゐる ○同 櫛 ハジ今俗にハゼといふ。漆に似て、粗きハゼ又はラフ

ノ木といふ。 ○同 櫛 カシ俗に櫛の字を用ゐるなり ○一 伯仲 劣り優りのなきこと、俗にオツカツといふ意なり。

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○六 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

○一四 千五百秋 千五百はただ多きを大方に云ふなり。百を富といふは、毛毛の轉

松云云

入日の影が峰の松に涼しくさして居る、その麓の田に、早苗を植うる賤の有様の、如何にも面白く見ゆるとなり。 ○一五 をかし

可笑、また可愛、兩様の意に用ゐるなり ○一六 粒粒皆辛苦 唐の李紳の農を憫む詩に曰く、春種一粒粟、秋

汗滴禾下土、誰知盤中飧、粒粒皆辛苦 ○一七 泉岳寺 赤穂城主淺野長矩、及その臣大石良雄、以下四十七人の義士を葬りたる寺。 ○同 本

門寺 池上村にあり、日蓮上人終焉の地にして、弘安年間の草創なり。 ○同 長渠 長距離に互れる溝渠。 ○一五 道了權現

足柄下郡にあり、永平寺七代の和尙了菴の弟子に、道了といふ、大力僧あり、平生の行迹奇、惟多く、遂に生身小天狗となれり、と云ひ傳へたり。小田原の最乗寺は、了菴の開基なれば、

道了も亦ここに ○同 迂回 遠き道を廻り行く事。 ○二 天の原云云 大空に照り渡れる、住せりといふ。 ○六 天の原云云 自影に近く見ゆる

ばかり高き富士の嶺は、四時共に雪の消ゆる時なければ、今も猶、神代の昔降りたる雪の消之や、らて残りて有るなり、といふ意。 ○同 駢列 並ぶ。 ○同

曾我祐成・時致の兄弟 祐成は河津三郎祐泰の長子、十郎と稱す。時致は祐成の弟、五郎と稱す。 ○同 工藤祐經

工藤祐次の子、祐成。 ○二 本邦三急流 富士川・最上川・球摩川。 ○同 激迅 水流の急激にして早きこと。 ○

時致の從祖父なり。 ○四 本邦三急流 富士川・最上川・球摩川。 ○同 激迅 水流の急激にして早きこと。 ○

時致の從祖父なり。 ○四 本邦三急流 富士川・最上川・球摩川。 ○同 激迅 水流の急激にして早きこと。 ○

時致の從祖父なり。 ○四 本邦三急流 富士川・最上川・球摩川。 ○同 激迅 水流の急激にして早きこと。 ○

同 清見寺 禪宗なれども開基詳ならず。足利高氏これを再興し嘉吉二年今川氏親僧明元を招きて中興の開山とせりといふ。○九 風光 けし

○同 久能山 始徳川家康を葬りし處なり。○二二 燒津 ヤイツ日本武尊東征の時此の地にて狩放ちて其の野を焼きしかば尊則叢雲の劍を抜きて草を薙ぎ燧を以て向へ焼き悉賊衆を滅し給ひきこれより此の處を名けて燒津といふ。○二三 徳川

三家 紀州・尾州・水戸の三藩をいふ徳川氏の分家なり。○二四 中仙道 東京より京都に至る武蔵・上野・信濃美濃・近江五箇國の道條なり。一に木曾街道といふ。○七 鵜飼 鵜を飼ひ置きて魚を捕へしむるなり。○西軍 大坂に與して徳川氏の東軍と戦へる軍勢。○二五 米原

○二六 石山寺 近江國滋賀郡石山村にあり眞言宗にして天平勝寶年間良辨僧正の開基なり。○同 隧道 トンネル

○二七 參籠 幾日も泊り居る事俗にいふオコモリなり。○二 蟬丸 字多天皇の皇子敦實親王の雜色にして姓氏詳ならず或はいふ延喜帝の第四子なり。○六 街衢整正 市街道路の乱雜ならずして正しく整へること。○二八 平安神宮 桓武天皇を祭れる官幣

○全 銀閣寺 鹿ヶ谷の北に在り禪宗にして夢想國師の開基なり。明久二年足利義政別業をこの地に營みて、○全 南禪寺 東三條の北に在り舊龜山法皇の皇居なり。○全 知恩院 圓山の北數町に在り淨土宗の總本山にして圓光大師の開基なり。○全 八坂神社 即祇園社にして四條の東端に在り。素盞鳴尊・稻田姫及八王子を合祀せり。○全 清水寺 延暦年中僧延鎮坂上田村麿と謀りて寺を建て觀音寺と號せり。しを大同二年紫宸殿を賜ひて伽藍となし清水寺と改めたり。○

○全 東大谷 東本願寺の祖廟なり。親鸞聖人の廟塔は後の山腹にあり。○全 西大谷 西本願寺の廟所なり。○六 三十三間堂 蓮華王院三十三間堂は白川院の御願にして備前守平忠盛奉行して建立せる寺なり。○全 泉涌寺 センイツジ大和大路一の開基なり。其の後文徳天皇の御宇齊衡三年に左大臣緒嗣再建して天台宗となし仙遊寺と號せり。後中興の開山我禪より以來天台・眞言・禪の四宗を兼學す。又當山の麓より靈泉涌出しければ號を泉涌寺と改めたりといふ。○全 高野川 タカノ川又大原川・八瀬川と稱し源を山城

○全 上加茂社 愛宕郡上加茂村にあり祭神は加茂鴨村に至りて賀茂川に入る。○七

○全 平安神宮 桓武天皇を祭れる官幣

○全 泉涌寺 センイツジ大和大路一の開基なり。其の後文徳天皇の御宇齊衡三年に左大臣緒嗣再建して天台宗となし仙遊寺と號せり。後中興の開山我禪より以來天台・眞言・禪の四宗を兼學す。又當山の麓より靈泉涌出しければ號を泉涌寺と改めたりといふ。○全 高野川 タカノ川又大原川・八瀬川と稱し源を山城

○全 上加茂社 愛宕郡上加茂村にあり祭神は加茂鴨村に至りて賀茂川に入る。○七

○全 平安神宮 桓武天皇を祭れる官幣

○全 泉涌寺 センイツジ大和大路一の開基なり。其の後文徳天皇の御宇齊衡三年に左大臣緒嗣再建して天台宗となし仙遊寺と號せり。後中興の開山我禪より以來天台・眞言・禪の四宗を兼學す。又當山の麓より靈泉涌出しければ號を泉涌寺と改めたりといふ。○全 高野川 タカノ川又大原川・八瀬川と稱し源を山城

○全 上加茂社 愛宕郡上加茂村にあり祭神は加茂鴨村に至りて賀茂川に入る。○七

○全 平安神宮 桓武天皇を祭れる官幣

○全 泉涌寺 センイツジ大和大路一の開基なり。其の後文徳天皇の御宇齊衡三年に左大臣緒嗣再建して天台宗となし仙遊寺と號せり。後中興の開山我禪より以來天台・眞言・禪の四宗を兼學す。又當山の麓より靈泉涌出しければ號を泉涌寺と改めたりといふ。○全 高野川 タカノ川又大原川・八瀬川と稱し源を山城

○全 上加茂社 愛宕郡上加茂村にあり祭神は加茂鴨村に至りて賀茂川に入る。○七

○全 平安神宮 桓武天皇を祭れる官幣

○全 泉涌寺 センイツジ大和大路一の開基なり。其の後文徳天皇の御宇齊衡三年に左大臣緒嗣再建して天台宗となし仙遊寺と號せり。後中興の開山我禪より以來天台・眞言・禪の四宗を兼學す。又當山の麓より靈泉涌出しければ號を泉涌寺と改めたりといふ。○全 高野川 タカノ川又大原川・八瀬川と稱し源を山城

○全 上加茂社 愛宕郡上加茂村にあり祭神は加茂鴨村に至りて賀茂川に入る。○七

創なり
といふ。 ○全 下加茂社 愛宕郡下加茂村にあり。多々須
玉依比賣命・大山咋神を祭れり。 ○全 東西本願寺

東本願寺は、鳥丸六條の南にあり。慶長七年、教如上人徳川幕府より、六町四方の寺地を賜はりて、建立せる者なり。西本願寺は、龜山院御宇、文永九年、親鸞聖人の息女、覺信尼公勅を蒙りて、洛東大谷に始めて廟堂を建立し、其の後所
々に移りしが、天正十九年、六條堀川に移れるなり。 ○全 東寺 八幡山教王護國寺、秘密八條の南にあり。舊、鴻臚館なりしを、弘仁四年、弘法大師に賜はりて、寺とせる者なり。 ○全 金閣寺 平野の西北、衣笠山の麓に在り。禪宗にして、鹿苑寺といふ。

應永四年、足利義滿の造營せし者なり。 ○全 大徳寺 龍寶山と號し、市北愛宕郡東紫竹大門村字紫野にあり。大燈國師の開基にして、正中元年の創建なり。

○全 平野神社 延暦年中の建立にして、今木神・久度神・古關神・比賣神・縣神の五社あり。而して、今木神は源家氏神、久度神は平家氏神、古關神は高階氏神、比賣神は大江氏神、縣神は中原。

清原・菅原・秋篠四姓の氏神なり。 ○全 北野天神 市の西北隅、字北野にあり。天曆九年の創建にして、菅原道真及夫人嫡子を合祀せり。 ○全 仁和寺 眞言宗にして、仁和四年の創建なり。宇多天皇讓位の後、御室を此の處に營みて、密教を修せられしより、又御室といふ。

○全 太秦寺 二條通の西にあり。聖徳太子の建立にして、始、蜂岡寺と稱せしが、後、廣隆寺と改めたり。 ○三六 牙城 城の内郭の主將の

居る處則本丸なり。 ○三 壘壁 城壁に全じ。 ○八 釀酒 酒を醸造する事。 ○四 十握劍 トツカツルギと訓む。握は搏むにて、四指を並べたる長を云ふ。書紀には、握と書き、古事記には、拳と記せり。さて、十拳は、劍身の長さを云ふ。猶、九握劍、八握劍等あり。 ○全 寸段 切れに斬りくたくことなり。書紀に寸斬とあり。この意なり。 ○五 天津日嗣 天皇の御位の尊稱。 ○三五 國造 上世地方を襲の官にして、其の區域略後世の郡程なり。孝徳天皇の御時に郡を建てられて、多く郡司となされたりき。 ○七 やがて そのまま、二

熊澤先生 名は伯繼、字は了介、蕃山と號す。通稱は次郎八、中江藤樹の門に入り、陽明學を修む。正保二年、備前に至り、芳烈公に仕ふ。公太に悦び、委ぬるに、國政を以てし、祿三千石を賜ふ。後去りて下

總に在り。元祿四年歿す。年七十三。 ○全 中井藤樹 名は原、字は惟命、藤樹は其の號、與右衛門と稱す。近江高島郡小川村の人。祖父伯耆侯加藤泰興に仕ふ。父近江に在りて、農に隠れ、祖に先ちて歿せり。藤樹乃祖に従ひて、伯耆侯に仕ふ。後泰興封を伊豫大洲に徒す。藤樹亦祖父と共に之に移る。時に甫めて十一。藤樹性至孝、恒に母の獨、郷里にあるを憂ひ、伴ひ來らんと欲す。然れども、母他邦に往くを欲せず。因て遂に官を捨て、逃れ去る。時に年二十七。藤樹初程朱の學を治む。已にして王陽明の説を信し、好みて孝經を講じ、愛敬の二字を掲出して、人に誨む。藤樹人となり、温厚、躬ら行を先にし、文詞を後にす。人賢恐となく、皆

七

六

其の徳に服して善に興起せざるなし。一時稱して近江聖人と曰ふ。慶安元年八月廿五日歿す。年四十一。○同 四 からまりの馬 驛驛の馬の四足を洗ふことなり。俗に四下の合字を用ゐる。又此の語四足の音の

○ 三七 そこ 對稱の代名詞。稍下輩に用ゐる。その

○ 三九 鳥目 錢なり。○ 四一 いなみ 拒絶することわり。俗に四下の合字を用ゐる。又此の語四足の音の

○ 四二 あさりあるく 探がし求むること。○ 同 からうじて 辛くしてなりやうやうのことにて

熊襲 クマソ、筑紫にありし夷の名なり。○ 同 七 新羅 シラギ昔朝鮮國を三韓と呼びし頭その一ツの國名なりき。○ 四三 殫す かりと云ひて未、非らずして假に棺に藏め置く事。○ 四六 高麗・百濟 コマ・クダヲ此れに新羅を併せて三韓と稱せり。○ 四七 經

典 聖賢の書。○ 四九 木槿 ムクゲ俗にはちすとも云ふ。○ 五〇 纖維 セン非細き筋。○ 五三 いかにせん 都の春ののどかなるを君寵の深きにたとへあづまの花を池田にある母によそへてよめり。一首の意は深き君の寵を忝なくいと惜しく思はぬにてはなれども養育の恩厚

○ 五四 かぶろ 童子の髪を短く切りて結はずして亂し置くを云へり。此處は筆の先の切れたるを形容して云へる也。○ 同 七

いまはし かのまはしの音便。○ 同 八 秘閣 書家の用ゐる腕鎮の如きものにして竹を以て作り細字を書く時腕をその上に置き書き者なり。○ 同 九

○ 同 一 同 ばさま 間なり。○ 五七 もやにぬて もやは喪屋なり。はらくは雨の音なり。一首の意は喪屋に居りてばらく

降りくる雨は眞の雨にはあらで、なき人を戀ふる涙なりとなり。○ 同 九 藤衣 藤衣は喪服なり。ふぢころも、ころもど重り、喪服を着たる身はさらぬだにもの悲しきに、頭しも丁度冬の初とて、身に寒き風の吹き渡れば、木の葉がはらくと散り行く音が、いとも悲しく聞ゆと云ふ意なり。○ 同 七

五八 鞣す なめすとは獸皮を製して柔かき革となすこと。○ 六一 天才 生れながらにして、亨け得たる才智。○ 同 八 搖籃 ヤウラン西洋にて小兒を入れ置くゆりかご也。○ 六二 赤黒 赤や黒のイ。○ 六三 司馬達等 南梁の人に來朝せり。○ 同 四 大臣 オホオミ。○ 同 六 大連 オホムラジ上代の職大臣と共に後世の

體天皇の御代に來朝せり。○ 同 四 大臣 オホオミ。○ 同 六 大連 オホムラジ上代の職大臣と共に後世の

體天皇の御代に來朝せり。○ 同 四 大臣 オホオミ。○ 同 六 大連 オホムラジ上代の職大臣と共に後世の

體天皇の御代に來朝せり。○ 同 四 大臣 オホオミ。○ 同 六 大連 オホムラジ上代の職大臣と共に後世の

體天皇の御代に來朝せり。○ 同 四 大臣 オホオミ。○ 同 六 大連 オホムラジ上代の職大臣と共に後世の

體天皇の御代に來朝せり。○ 同 四 大臣 オホオミ。○ 同 六 大連 オホムラジ上代の職大臣と共に後世の

體天皇の御代に來朝せり。○ 同 四 大臣 オホオミ。○ 同 六 大連 オホムラジ上代の職大臣と共に後世の

體天皇の御代に來朝せり。○ 同 四 大臣 オホオミ。○ 同 六 大連 オホムラジ上代の職大臣と共に後世の

體天皇の御代に來朝せり。○ 同 四 大臣 オホオミ。○ 同 六 大連 オホムラジ上代の職大臣と共に後世の

體天皇の御代に來朝せり。○ 同 四 大臣 オホオミ。○ 同 六 大連 オホムラジ上代の職大臣と共に後世の

體天皇の御代に來朝せり。○ 同 四 大臣 オホオミ。○ 同 六 大連 オホムラジ上代の職大臣と共に後世の

家より任
せられき。○六四 伽藍 梵語にして精舎と譯す。佛
道を修する處寺の意也。○八 同 四天王寺・法興寺

崇峻天皇二年七月、馬子與諸皇子謀、圍守屋第、時厩戸皇子東髮於額、而隨軍後、自新度日、將
無見敗、非願難成。乃斷取白膠木、茨作四天王像、置於頂髮、而發誓言、今若使我勝敵、必當奉爲
護世四天王。起立寺塔、流通三寶、中略平亂之後、於攝津國、○六六 ほんのぼの云云
造四天王寺、中略蘇我大臣、亦依本願、於飛鳥地起法興寺。○二

これは古今集の羅旅の部に載せたる歌なり。一首の意は、ほのほのと明け渡る朝、明石の
湍門の打ひかへる、淡路島の廻廻に立ちわたれる、霧がくれを海士の帆舟の漕ぎ行く様
の哀なるを、悲しと眺めやりたるなり。左註に、この歌は、或人の曰く、柿本の人丸がなりと
あれど、おぼつかなし。今昔物語には、小野篁の隠岐の國へ流されし時の詠として、詞をさ
へ加へて、八十島かけての歌の次に連ねたれど、更に據がたし、但、歌
の調、萬葉集の歌と同じからねば、平安朝の人の詠なること明かなり。○四 ありあけ

の云云 此の歌は金葉集卷の三秋の部に、月のあかかりける頃、明石にまかりて、月を
見てのぼりたりけるに、都の人人、月はいかにと尋ねければ、詠める、平忠盛朝
臣とあり。一首の意は、月の光の明なるに、地名の明石をかけ、波の寄るに夜を掛けて、
月の光はあかくして、さながら晝の如くなるに、ただ波ばかりよると見えきとなり。○

六六 梶原源太景季 景時の長子、宇治川一ノ谷に勇名を轟かせしが、○同 七
九 建仁の初め、父と同じく、駿河狐崎に敗死せり。○七

きくれて 行き暮れて、木の下蔭を宿とせ。○同 七 薩摩守忠度 刑部卿忠盛の子、
ば、花や今宵の、あるじならまし。○七 同 七 薩摩守忠度 刑部卿忠盛の子、
を善くせり。壽永二年一月一

ノ谷の役に戦死す。年四十一。○八 同 無官太夫敦盛 敦盛は、參議經盛の子なり。從
なきを以て、世呼ひて無官の太夫といふ。一ノ

谷の役、熊谷直實の殺す所となる。時に年十七。○九 同 熊谷次郎直實 平の貞盛の
納言知盛に仕へ、後源頼朝に仕へ、屢大功を建てき。後、入道して僧源

空の弟子となり、名を蓮生と更む。承元二年九月十四日を以て死す。○三 夢前川
ユメサ

キ川 ○同 楫保川 イボ ○六八 軍港 全國の海岸及海面を、五海軍區に分ち、各
て、その軍區を管轄す。即、御一横須賀第二區、

第三佐世保第四舞鶴第五室蘭これなり。○七〇 日本三景 陸前の松島、安藝の嚴
島、丹後の天の橋立、

○七二 むかひ城 敵の城に相對して、
造りたる城をいふ。○七四 君の先祖は云云 仁徳天皇の
七

當り、新羅朝貢を闕きしかば、上毛野君の祖、竹葉瀬、及、川道を遣して、之を討たしめ給ひき、
二人新羅に至り、大に敵を破り、數百人を殺し、四邑の人民を虜にして、歸りし由、紀に見え

た。○同 三 よさして 寄すは托する意、さすは敬語なり。○七五 ゆづる 弓の
り。○三 帝が大軍を托し給ひしを云ふ。○三 弦也。○

同いさむ 戒むる ○七六 孵化 卵より生
 出づると ○八一 ひたぶる 一向ひたすらと
 同七意なり、イチ
 ニ。 ○八四 觀世太夫 此の太夫の名詳ならず、觀世家
 には、別に云ひ傳なき由なり。 ○九 木賊刈 舞の
 八五 うけず顔 同意出來ぬ感
 心せぬ顔付 ○觀進能 觀進の爲に興行する能狂言なり、觀
 の爲に、僧徒の普く信者を勸
 めて、錢物を奉納せしむると、

二之卷

○四頁 新羅 一の卷
 五行 渤海 今の滿州の地 ○六 呂宋・マラツカ 共に南洋の島なり
 ○八 太泥 暹羅の南に
 同 占城 安南の南界に在り、古の林邑縣後、安南に合せらる。則、越裳氏の地なり。 ○同 東埔寨 安南と西暹羅との東に在り、後、安南に併せらる。 ○同 暹羅 西印度に在る國名。 ○七 文房 書齋讀書の室。 ○一〇 世襲 官職等を世世子孫に傳ふる事。 ○同 族長 上古族制を以て、國家編制の基本と爲しし時、一族の長たりし者を云ふ。 ○同 墨守 從來の例にのみ習ひて、改進する事なきを云ふ。 ○六 畫一 規則正しく同一なる事。 ○一一 中央集權 郡縣の官を、管轄の下に置き、中央政府の管轄の下に置き、
 ○二 高向の立理 タカムク、のクロマサ、はじめ高向漢人と稱し、又、黒麻呂と名く、推古天皇の十六年、小野妹子に従ひ、隋に行き、留學すること三十二年、舒明天皇の十二年、唐より還る、大化元年、國博士に擧げらる。白雉五年、唐に使し、留連數月、唐に卒す。 ○同 氏族制度 上古より大化改新前迄は、所謂骨の制にして、血統の關係を以て、直に、國家公權の編制としたるをいふ。 ○同 税率 租税の標準。 ○一二 八省

中務・式部・治部・民部 ○同冠位 大化三年、七色十三階の冠を制し、五年更に冠位十九階を制せらる。前に制する所は、禮義に用ゐる。此れは爵位を表する。

○五 六十六部 六十六部は、行脚僧の六十六部の法華經を、日本六十六國の靈地に納むること。後には、國國の國分寺、或は一の宮などに納む。今、泛く僧俗男女諸國の神社、佛宇を巡拜する者の稱、順禮と異ならず。

○七 志有る日 亡き人の忌日、などを指す。

ら が ふ 争ふ ○一六 咽喉 最も重要な門戸の意にして、恰も人の咽喉に相當するなり。

○一八 水城 天智天皇の時、唐土及三韓に備ふる爲に造りたる者にて、大なる垣を築きて、水を貯へたる也。

○二四 西征將軍宮 後醍醐天皇の皇子懷良親王。

○二四 染職の明後日 ヨウヤノアサツテと訓む。明後日は出来上る可きを約し、期に及びて至れば、未成らず。復明後日はと云ひて、遂に際限なし。

○二七 熱鬧 市民群集の甚たしき處。

○二八 妙齡 今を盛り年の十七八の若き年齢。

○三三 無賴 俗に所謂ゴロツキ。

○二九 關八州 相摸・武藏・安房・上總。

○二四 別當 武家にては、政所侍所等の長官を指す。

○三一 莊園 中世朝廷より褒賞等に賜はりし、皇子諸臣等の私領にして、國司の所管外なり。されど、後には私に開墾し、或は他を兼并し、強奪せるもあり。

○三二 地頭 頼朝が莊司に副へて置ける職。

○三三 守護 諸國の國司に副へたる職にして、此も頼朝が朝廷に奏して置ける職也。

○三三 安土 アツチ、近江に在り、織田信長城を此處に築く。

○三三 天晴 アツパレ、ほめ驚くに發する。

○三三 屋形 貴族の居宅の稱なり、足利氏の頃より、將軍より殊に賜はりて、國威助詞。持大名などの居る所を稱せしより、又、その大名の代名詞に用ゐしなり。こゝにては、信長を指せるなり。

○三四 あなかしこ 噫畏しより、慎むべし、秘すべし、の意となり、或は尊び敬ふ意ともなれり。

○三六 蛭 蛇などのウ子ル貌。

○四三 駟馬 四頭立ての馬車。

○四四 凄慘 ものす。

○四五 唵 喉の音。

○五二 忽必烈 元の世の祖なり。

○五二 執權 鎌倉將軍の執政。

下總・常陸・上野・下野の八ヶ國にして、箱根の關より東にあり。故に關東八州と云ひ、又、略して關八州と稱す。

○三〇 朝官 朝廷の役人、當時朝廷は京都に在りき。

○三一 莊園 中世朝廷より褒賞等に賜はりし、皇子諸臣等の私領にして、國司の所管外なり。されど、後には私に開墾し、或は他を兼并し、強奪せるもあり。

○三二 地頭 頼朝が莊司に副へて置ける職。

○三三 守護 諸國の國司に副へたる職にして、此も頼朝が朝廷に奏して置ける職也。

○三三 安土 アツチ、近江に在り、織田信長城を此處に築く。

○三三 天晴 アツパレ、ほめ驚くに發する。

○三三 屋形 貴族の居宅の稱なり、足利氏の頃より、將軍より殊に賜はりて、國威助詞。持大名などの居る所を稱せしより、又、その大名の代名詞に用ゐしなり。こゝにては、信長を指せるなり。

○三四 あなかしこ 噫畏しより、慎むべし、秘すべし、の意となり、或は尊び敬ふ意ともなれり。

○三六 蛭 蛇などのウ子ル貌。

○四三 駟馬 四頭立ての馬車。

○四四 凄慘 ものす。

○四五 唵 喉の音。

○五二 忽必烈 元の世の祖なり。

○五二 執權 鎌倉將軍の執政。

五四 いしゆみ 石弓或る仕掛ありて石を敵に投げやる兵器。〇五七 宮方 官軍南朝に順へる方なり。〇六お

とこひ 弟兄に同じ、ハヲカラの意。〇同 里見伊賀守 名は時成越後の人、新田氏の族なり。〇七 將軍方

足利將軍の味方。〇五八 不覺 断 〇六五 桑折 〇六七 日本三景 一の巻にあり

同 眼界豁然 見渡すかぎり、目もはるにひらけたる貌。〇六八 第八師團 弘前に在り。〇七五 玄圃

京都の儒者、姓は久川、名は概負、玄圃はその號也。〇二 百番のうたひ うたひの曲に、内外等の名目ありて、各百番とす。〇七六

與力 徳川幕府の時江戸町奉行に属せし役の名。〇六 やも男 妻なき男。〇同 親類 かりは許也。〇

七九 子過ぐる頃 十二時過ぐる頃なり。子夜半の十二時なり。〇一 妙用 運用の妙巧なると。〇六 世

變 世のうつり變り。〇八 盤渦 〇九 迫門 セト海の陸地或は島山の間に迫りて通ふ處。〇九五 太

閻 たいカフ關白の子、關白となりし時、其父なる前の關白を稱する號。〇同 御簾中 高貴の人の奥方の稱。〇五 足輕 賤しき兵

卒の徒歩にて出でたつもの。〇六 馬廻 武家にて主君の馬の周圍に附添ふ侍、即、麾下の士なり。〇九六 うなぎ長屋

表にうなぎ垣有りて、内に長屋あり一間に仕切りて、足輕の住居する所。〇九九 ぶ

とせるより、この名あり、勤の隙隙には、うなぎを摘みて、賣りけりどぞ。〇二 〇一〇〇 有附く 仕官する事。〇三 什物 賣物

くめ 木綿綿入のと也。〇二

三之卷

○二頁 井榦 井榦又井筒なり。榦は榦又は韓に全じ。○三 小野道風 小野道風は、大宰大貳葛弦の子、好古の弟なり。書を善くし

世に藤原佐理、藤原行成と稱して三蹟といふ。醍醐・朱雀・村上の三朝に歴事す。正四位下内藏權頭に至る。康保三年卒す。年七十一。○四 平等院 宇治南にあり。初は河原左大臣融公の別荘なりしが、其の後陽成院此の地に行宮を建てられ

宇治院と號したり。それより六條左大臣雅信公の所領となりしが、又御堂關白道長公この院を得て、山莊とせられしを、其の後、子息宇治關白頼道公永承

七年に寺となして、平等院と號し、法華三昧を修せしめられたり。○四 南禪寺 一の出づ。○六 俗びて 一ヒナピテ。田舎 二六 高臺寺 三 猿峰山高臺寺は、慶長年中に豊臣

秀吉の北の政所建立の菩提所なり。宗旨は 同 大佛殿 大佛殿方廣寺は、後陽成天皇御宇天正六年豊臣秀吉の建立

禪なり。○同 大佛殿 大佛殿方廣寺は、後陽成天皇御宇天正六年豊臣秀吉の建立なり。其の後焼亡せしを、慶長十五年豊臣秀頼これを再營せ

り。○八 釋迦堂 大報恩寺、亦千本釋迦堂といふ。本尊釋迦佛は安阿 九 四足門 ヨツアシモン。門の建築に、別に添柱を四本用ゐ

て造りしものにて、高貴の所に設くる者なり。○一 桃山御殿 豊臣大岡の別荘なり。○

一 破風 ハフ。屋の切棟の端、兩下して山形をなす處。○二 甚五郎 左甚五郎は有名の彫刻家なり。兼

く紀伊・根來・東坂本の人と。寛永十一年四月廿八日歿す。時に年四十、或は四十一といふ。○四 透明彫 スカシホリ。刻物の細工

透したるものなり。○六 古法眼 永徳 狩野永徳は、畫家狩野氏第五世の人なり。世に古永徳と稱す。松榮の長男、初の名は州信、後重信と改む。

通稱源四郎、織田信長に仕へて近侍たり。後、法眼を歴て法印に叙せらる。畫法を父に學び、又祖父元信の筆蹟を追慕し、大に畫學を研究して、其の技益進む。其の畫く所の山水花鳥

人物鳥獸、悉巧なり。就中大畫に妙を得、或は松梅長さ一二丈、或は人物高さ三四尺、其の筆法皆粗にして草なり。而して元信と相顔顔するの勢あり。曾安土城中畫の間一式を筆作

して、信長の感賞を受け、又豊太閤に仕へて、聚樂殿の金壁等を畫く。當時諸大夫の第も、亦大夏を營み、金壁を設くれば、必其の畫を求む。又、桃山御殿百雙の屏風、半ばは其の筆する

所なり。天文十二年正月十三日生れ、天正十八年九月十四日父に先ちて歿す。年四十八。○九 鱒 鱒ハラ。○一五 搔網 掻網ハカミ

一六 大雅堂 池野大雅、名は無名、初の名は勤、字は貸成、秋平と稱す。霞魚・九霞・山魚・竹居、是瀨釣叟・三岳道者等の號あり。京師の人、幼にして、穎敏、五歳にして能く

せりと
いふ ○全
九 心をやられき こゝなるやるは晴らし慰むる意なり。らるは敬語なり。 ○一七
ふくつけし

貪る心 ○七
おももち 顔 ○一八
なまかたはらいたし なまは少しにてかたは

らいたしは傍観に笑止 なりとのこゝろなり。 ○一八
右手 メ ○一九
左手 ユン ○二一
守 相摸守時 ○二一
頼を云ふ

○二一
あかり障子 現今普通に云ふ障子なり。昔はた障子と云へば襖の事を云へり。 ○二一
せうこ 兄のこと

○二一
城介義景 安達義景は景盛の子なり。世々鎌倉府に仕ふ。嘉禎中父の職を襲ぎて。秋田城介と爲り。從五位下に叙せられ。評定衆と爲る。四條帝崩して嗣なし。北條泰時義景を京師に遣し。後醍醐帝を立つ。建長中病を以て薙髮し。願智と法名し。壽で卒す。 ○二一
けいめい 經營に營むことなり。

○二二
修理 修繕に同じ ○二二
まつりごつ 政事を動詞に働かせたるにて。治むる意なり。

○二三
式目 しきよく制度の箇條書。 ○二三
おほろげならぬ 一通りならぬ。 ○二四
上方 京都

○二六
朝鮮御陣 豊臣秀吉が朝鮮を伐ちしときを云ふ。 ○二七
兄弟かきにせめげ

き地方 を云ふ。 ○二六
朝鮮御陣 豊臣秀吉が朝鮮を伐ちしときを云ふ。 ○二七
兄弟かきにせめげ

ども外には其のあなごりをふせぐ 詩經小雅に云、兄弟鬩于牆、外禦其務、内に在りては兄弟互に恨み訴ふることありども、外より侮を受くる時は、よく一致して之れに當るなり。 ○二八
磚茶 だん茶とて、茶の粉品を用ゐて、固めて磚の如くなしたるものにて、小刀にて削りて用ゐるものにて、西比利亞等へ多く輸出するものなり。 ○二九
眞土 マツチとよむ。普通には

壤土と書きて砂利も砂も なま、極上等の土をいふ。 ○三一
嫩軟 ドナン ○三一
撈利 ラウクワ、と ○三三

三井寺 長等山園城寺と號し、大津市街の西にあり、天台宗にして、天安二年僧圓珍、叡を奉して建立すといふ。本堂には觀音の像を安置す。 ○三四

洛陽 支那の都の名を其の儘用ゐたるものにして、京都を指せり。 ○三四
長嘯子 木下長嘯、名は勝俊、初字を大藏と云ひ、肥後守家定の長子なり。

り、勝俊幼より關白秀吉に仕へ、從五位下に叙し、若狹守に任せられ、姓羽柴氏を賜はり、龍野城主たり。天正十六年從四位下に叙し、侍從に任せらる。征明の役兵を率ゐて那古那行營に從ふ。文祿三年若狹に封せられ、采邑八万一千五百石を食み、小濱城に居る。左近衛權少將に任せらる。關ヶ原の役、西軍に黨するの故を以て、亂平ぐに及びて、封を奪はる。後京師東山の靈山に潜居し、名を更めて長嘯子と稱し、髪を剃りて入道す。是より和歌を咏吟して、風月を樂む。又、大原野に潜居して、名を天哉翁と改む。慶安三年六月を以て卒す。時に年

二十一

八十一なり、諡す。○三四 わがほかには 自分の外に誰か植た松てあらふか、甚美事
て大成院と號す。○七 なる松たが、惜しい事に枯れた故、今又自分
か植うるのてあるから、志賀の浦風よ心して ○三五 山門 比叡山延曆 ○三六 畋獵
吹いて、決して枯らさぬ様にせよ、と云ふ心也。○七 寺の異稱。○八
デンレフ、○三七 麻髻 髪を頂に集めて、麻にて束ぬる也。○三七 麻舎 麻は公のいへにし
狩すると、○四 麻にて束ぬる也。○五 公の役所をいふ。○四 三
英發 利發にして、才氣に富むことをいふ。○三九 泗川新塞 島津義弘慶長三年九月泗川の戦に
湖の新塞の戦にも、又大に明軍を破り、首を斬ること三万餘級。○三九 關所 其の土地の所有主の罪に當りなごし
を破り、首を斬ること三万餘級。○三九 關所 其の土地の所有主の罪に當りなごし
て、亡びて、其の領主の關けてある所。○四三 將軍家 三代將軍 家光なり。○四三 御かちど 御歩行
岡のあなた、谷中の里に、何がしの院とて、一の眞言寺あり、云々の語のみありて、その名をしるさず。○四四 八旬 八十歳 ○四四 此寺 本文の
はぐむ 雅齒萌むの意、老人の齒脱けて、復、小き齒を生ずるより轉して甚しく老いた
るをいふ、又三齒さすともいひて、老いて齒のまばらに落ちて、上の齒下の齒
と、三つさし合ひ、くみあふやうなるをいへり、とに ○四四 はしたなく 附きなく、
か、たゞ年老いたるさまとのみ心得てあるべし。○八 愛相なき

意 ○四五 ふつくむ 憤る意、俗に云ふフク
也。○三 レテ怒ることなり。○四五 後住 已に繼きて、寺に住む僧。○七 寺
もくろみなん くるむは、俗に云ふさびのつくこと云ふ意。○四七 堪能 才あり、上手なること。○四八 婆羅
ボル子オ ○四八 瓜哇 ジャバ ○四八 蘇門答臘 スマトラ ○四九 瀦澤 水のたまり居る澤。○
五二 榕樹 たこ ○五五 いもやすからで いは寝入ること也。安らけく寝入ること得ずしての意なり。○
五六 霄漢 セウカン、天の事也。又霄間とも書く。○五七 よみの國 人死して後に行く處なり、夜見の義也。○五七 宗
易 泉州堺浦の人、俗姓は千、利休居士と稱す。○六 遠州流 寛永正保の頃の人にして、小堀遠江守政一の創めたる茶の湯の一流なり。○
六〇 石州 片桐石見守真正を流祖とせる、茶の湯の一流なり。○六二 むねもたえ 胸悶えなり、胸の苦し
く、て、むねへの様なり。○六二 梅檀 センダン、香木の名。○六二 頻迦 迦陵頻伽と四字連續す。これは梵語なり、譯語
には、妙聲鳥といふ。正法念處經に云く、山名曠野、其中有迦陵頻伽、出妙音聲、如是美音、若天、若人、無能及者、唯除佛音聲、とあり。普通には、
孔雀の如く畫けり、されども、假託の鳥にして、人間の見るべからざるものならむ。○

六四 禮盤 法師が乗りて、行
五 反芻獸類 ハンスウ、食物を一時に食ひ置き、
再び口に戻し食する動物にて、牛も

その一 ○ 七一 右大將 源頼朝を
指せる也 ○ 七一 徳本 長田徳本は名醫なり、知足齋
と號す。三河大濱村の人、貧窶

自ら甘んじて、勢利を慕はず、醫を以て四方に周遊す。大永享祿の間、甲斐に至り、武田信虎
に遊事す。武田氏滅ぶるに及びて、信濃諏訪郡東堀村に退き、自草廬を構へ、號して茅菴と

云 ○ 七二 籬 シタミ、底は方にし ○ 七五 夾袋 カク ○ 七七 應舉 四山應舉は、四
ふ ○ 八 籬 て、上圓き籠なり。 ○ 七五 夾袋 シ ○ 七七 應舉 山書流の祖な

り。性は藤原、後源氏に改む。字は仲選、初の名は仙嶺、後應舉と改む。仲均・儒齊、又鴨水漁夫と
號す。通稱は主水、京師に住す。初、畫を狩野派の畫家、石田幽行に學びて、出藍の褒あり。多く

古名蹟を摸して、敢て規倣に泥まず。自機軸を出して、一家をなす。其の畫く所の人物花草
鳥獸虫魚、皆其の寫生にして、真に逼る。實に狩野探幽以來の大家と謂ふべし。世上此の畫

風を稱して、圓山風と曰ひ、又後世、四條風、又上方 ○ 七七 狙仙 狙仙は畫家なり。名は守
畫と曰ふ。寛政七年七月十七日歿す。年六十三。 ○ 七七 狙仙 象字は叔牙、森氏を冒す。

如寒齋、又靈明菴の號あり。西宮の人。大阪に住す。畫法を如春齋に學び、專動物を畫き、殊に
猿を畫くに妙なり。因りて狙仙の號あり。性質篤行にして、遺蹟世に稱譽せらる。といふ。文

政四年七月二十一日歿す。年七十五。 ○ 七五 祇園の社 八坂神社に同
日歿す。年七十五。 ○ 八 祇園の社 八坂神社に同 ○ 七九 けはひ 氣色又
は様子。 ○

八一 むげ 一向に、又は
二 史乘 歴 ○ 八六 中納言宗行卿 左大辨行隆の
子、承久の役に、

謀に預りしを以て、眺へられ、鎌倉へ送らる ○ 八八 雪舟 雪舟本の氏は小田、名は等楊
、途中、駿河國燒津原にいたりて、殺さる。 ○ 一 雪舟 雪舟はその號、又備溪齋、米元

山主人等の號あり。備中赤濱の人。年十二三の時、同州寶福寺に入りて、僧となる。天性畫を
好みて、經卷を事とせず。寛正年中、便船を求めて、明に入り、四明山に登りて、天童禪寺第一

座となる。故に畫後に四明天童第一座と記せる者あり。明に在る時、その國人の請に應じ
て、本朝田子の浦の景色を畫く、その畫の妙處は、則之を天性に得て、更に古人の蹤跡を踐

まず、最、山水に長せり。永 ○ 八八 瀟湘 瀟湘夜雨、洞庭秋月、山中晴嵐、漁村落照、江天暮雪
正三年歿す。年八十七。 ○ 五 瀟湘 瀟湘夜雨、洞庭秋月、山中晴嵐、漁村落照、江天暮雪
煙寺晚鐘、遠浦歸帆、平沙落鴈、これを瀟湘の八景

といふ。 ○ 九一 譜代の諸侯 徳川氏配下の大名中にて、始よ
り世々其の臣下たりしもの。

四之卷

一頁 別棟に放ちて、造
 五行 はなち出 り出したる家。 ○二 いでまゝ 行幸をいふ。是は後鳥羽上皇
 を謀られしが軍破れて佐渡 ○二 冷泉爲兼 藤原爲家の孫爲教の子なり。正應中
 の國へ移され給ひしを云ふ。 ○四 織田右府 右府は右大 臣を云ふ。此
 に進みしが永仁中事に坐して佐渡に流され嘉禎元 年召し還され元弘二年薨す。玉葉和歌集の撰者なり。 ○全 織田右府
 れは織田 信長なり。 ○三 くさはひ 材料 ○六 沙曇り云々 沙曇りは沙氣に曇りた
 いて、見る目にかれたり。一首の意は、眼のかすみで物のあやめもわかざりし人民も恩賜
 の御恵に治療を受けて、今日からは、見る目がはつきりと、よくわかる様になるであらふ。
 ○九 承久の古 承久三年、後鳥羽上皇北條義時の専横を憤らせ給ひて、五畿七道に
 隠岐に土御門上皇は土佐に、順徳上皇は 佐渡に遷され給ひし其の古のことなり。 ○七 追遠 遠き昔を
 顯かにて、間違一五 毳毼 サンサン、毛のふさふさはぬをいふ。二 蓬蓬 ホウホウ、草木の盛
 はぬをいふ。二 毳毼 さとして居るかたち。 ○蓬蓬 に生ひ茂れる貌。 ○全 耽

耽 タンタン見 まはす貌。 ○一 殷殷 インイン、遠雷の轟く如き音響をいふなり。 ○全 萎縮 しをれ、ちぢむ。 ○一七 困
 憊 コンハイ、困り 疲るゝこと。 ○九 昂然 カウセン、意氣の盛なる貌。 ○二 悄悄 セウセウ、しをしを
 二四 已に如かざる者を云々 論語學而章にあり。已より劣れる者を友とし交
 る勿れと 二五 左大臣家 徳川三代將軍 家光をいふ。 ○九 將軍家 徳川秀忠 を指す。 ○二六
 いふなり。 ○八 春日局 名は阿福、齋藤利三の女にして、稻葉正成の室、徳川家光の乳母となる。寛永六
 年、命を奉じて京師に入る。詔して從二位に叙し、春日局の號を賜ふ。廿年九月
 六十五。 ○全 御勝の方 徳川家康の側室、姓は太田氏、父を源三郎康資といふ。後名
 を萬方と改め、家康の妻となる。寛永十九年八月逝す。 ○二六 駿河の御所 徳川家康 をいふ。 ○二七 御耳のうごきやうに 御耳の遠
 き様に也。 ○三 大御所 徳川家康 ○うけ難き事 信用出来にくきことなり。 ○八 大相國家 徳川
 ○二九 稻富 稻富伊賀の後にして、稻富流砲術の師範家なり。 ○全 西城 西丸 ○全 御臺所 秀忠の夫人
 淺井氏、贈從

一位崇源 ○三三 御不審をかうむる おとがめを受 ○三三 精舎 寺を

○三三 古法眼元信 畫家狩野氏第二世の人なり。足利義政に東山殿に仕へ近侍たり。義澄・義植・義晴に歴仕し。畫所預となり。越前守に任

せらる。永祿二年十月歿す。年八十四。 ○三六 丹青の妙 丹青とは繪のことなり ○四一 ねたばつけ

ぬが如し よき刀にても、切味の鈍りたりしを、其ま ○四二 長こならは トナラバと訓む。

生長したならば。 ○四二 あからさまに たちま ○全 杖にて教へよ

鞭撻して、きびし く教育せよとなり。 ○四三 父雖不父子不可以不子 古文孝經孔安國の序に曰く、經又云、敬其父則子說、敬

其君則臣說、而說者以爲各自敬其爲君父之道、臣子乃說也、余謂不然、君雖不君、臣不可以不臣、父雖不父、子不可以不子、若君父不敬其爲君父之道、則臣子便可以忿之邪、此說不通矣。

○四五 庖丁 料理し たたりけるを たるを ○四六 めさせむ 食はし ○全 胎

教 列女傳曰、古者婦人、姪不側、坐不邊、立不踣、不食邪味、割不正不食、席不正不坐、目不視邪色、耳不聽淫聲、夜則令醫誦詩道正事、如此則生子形容端正、才過人矣、これ即胎教

なり。 ○全 志志むら 肉を ○五〇 潮入 海水のさ ○五八 超然 テウセン、群を越えて抜け出

でた る貌。 ○六 塵寰 シンクワン、塵の世界。 ○八九 コンドル 鶯鳥類にして、ロッキ ○六〇 陸

離 光のきらき ○六一 北光 北光は極光の一なり。極光とは、南北高緯度の地に出現する一種の光にして、其の形状及光彩は種類甚多し。其

の北極四近に現るる者を北光といひ、南極四近に現るる者を南光と云ふ。此の現象の起因は、地球及空氣中の電氣にありと云ふ。 ○全 俯瞰 フカン、高

を見か ろすと。 ○六一 遠近の里 伊勢物語に昔男ありけり、その男身を益なきものに思ひなして、京には居らじ、東の方に住むべき所求めにどて往

きけり、信濃の國淺間の岳に烟の立つを見て、信濃なる淺間の岳にたつ烟をちこち人の見やはどかめぬとあり。 ○六四 人參 一莖直上し、梢

一莖を生じ、其の梢に細小花簇り生ず。五辨にして、淡綠色なり。中に白蓋あり、亦うこぎの花に似たり。花後に實を結ぶ。形圓くして、緑

に、秋冬に至り、紅に熟す。根を藥用に供す。 ○全 黃耆 ワウギ、又、ヤハラグサといふ。藥

三四尺、莖葉共に毛わけて、淡緑なり。夏梢の葉の間に黄白の花を開く。形あづきの花の如し。根のやはらかにして、綿の如き者を藥用とし、上品とす。根の硬き者を下品とす。

○六五 奥の上杉 岩代國會津の領主上杉景勝なり。 ○全 德川殿 德川家康 ○八 忠興 細川忠興 ○九

大阪の奉行 毛利輝元・宇喜田秀家等をいふ。 ○六六 内府 内大臣をいふ、こは德川家康をさす。 ○全 さる者

の娘なり さるは然るの意にて、世に俊れたる者をさす時、さる者とはいひなせり。細川忠興の夫人は、明智光秀の女なり。 ○六七 方人 方

○六八 さるふる兵 然るべく聞えたる、老練の武夫なり、との意なり。 ○全 打物 打ち鍛へて作りたる長刀・刀・鎧など、武器の

○全 古今和歌集の秘訣 秘訣とか、傳授とか、ことごとしくいひなせど、其の實はさしたることに非ず、も千鳥よぶこ鳥

○六九 古も今もかはらぬ云々 一つ心を種として、萬の言の

○七〇 二位法印 藤孝入道 幽齋なり。 ○七一 三條西大納言

○七二 高野山 紀伊國伊都郡にあり、弘法大師此の山を開きて、金剛峰寺を建立せり。 ○七

○七三 九俣の功を一簣にかき 書の旅葵に爲山九俣功

○七四 廣島條約 我總理大臣伊藤博文と、清國全權大臣李鴻章と訂結せる媾和條約なり。 ○八 藤原仲麿

○八七 附庸 所謂國姓爺なり、父を芝龍といふ、明朝の亡ぶるや、獨、臺灣に據りて、明の正朔を奉じて、義を唱へ

○八八 異 南をいふ。 ○八三 解物のひとへ 綿入、裕などを引はさきて、表のみ單にしたるなり。

○八九 鄭成功 所謂國姓爺なり、父を芝龍といふ、明朝の亡ぶるや、獨、臺灣に據りて、明の正朔を奉じて、義を唱へ

○九〇 藤原仲麿 左大臣武智麿の第二子なり、孝謙天皇の寵を蒙り、姓名を惠美押勝と賜ひ、紫微令中衛大將に進み、正一位に叙せられしが、後、反を謀りて、誅せらる。 ○九二 四

○九三 位 封戸、親王内親王に給ふを品封といひ、諸臣の三位以上給ふを位封といひ、五位已上にて、殊に功

○九四 位 封戸、親王内親王に給ふを品封といひ、諸臣の三位以上給ふを位封といひ、五位已上にて、殊に功

○九五 位 封戸、親王内親王に給ふを品封といひ、諸臣の三位以上給ふを位封といひ、五位已上にて、殊に功

○九六 位 封戸、親王内親王に給ふを品封といひ、諸臣の三位以上給ふを位封といひ、五位已上にて、殊に功

○九七 位 封戸、親王内親王に給ふを品封といひ、諸臣の三位以上給ふを位封といひ、五位已上にて、殊に功

○九八 位 封戸、親王内親王に給ふを品封といひ、諸臣の三位以上給ふを位封といひ、五位已上にて、殊に功

○九九 位 封戸、親王内親王に給ふを品封といひ、諸臣の三位以上給ふを位封といひ、五位已上にて、殊に功

ありて給はるを功封といひ通じて封戸と稱す。されば、廣嶽に賜ひしは、即功封なり。さて從三位の位封は、昔は百戸なりしが、後減じて七十五戸となりたれば、四位の封戸は五六十戸位なるべし。其の戸口より納むる田租の半(天平十一年より全額及調庸を得るなり。位田は五位以上に、其の田より獲る稻を給ふ。但、租を官に輸するなり。而して正四位は廿四町、從四位は二十町にして、女は三分の一を減するなり。位祿は四位五位に限り給はる者にして、正四位純十匹、綿一屯、布五十端、庸布三百六十常。從四位は純八匹、綿八屯、布四十三端、庸布三百常にして、女は減半するなり。○全 ありもせぬ偽にて、道鏡を以て天子とて、女は減半するなり。○五 あらぬこと せは、天下太平ならんと奏せしをいふ。○九四 禮懺 ナイサン、○九七 くらげ 海月一名水母、かたち月の海中にある。○七 禮拜懺悔 三 に似たるを以て、名づけたりといふ。○九八 沖つ浪たつの都 浪の立つに龍をかけて、龍宮城の莊嚴なる面影海面に浮べたるが如き立派なる巖嶋の宮居なりといふ意なり。○未のさがり 未は午後二時なり、さがりはすぎの意なり。

五之卷

○一頁 蒼生 人民を
 ○二行 蒼生 人民を
 まつりには、即、皇祖天神を祭る處をいふ。○四 夜のおとど 主上の御殿に
 批難す。○七 直衣 ナホシ官服の名にして、其の製大抵袍に同じ。○五 同上東門院 一條天皇の中宮、藤原道長の女、彰子なり。○一三 模倣 モハツ、まねること。○四 一四 水戸尾張宇和島 水戸は徳川齊昭、尾張は徳川慶恕、宇和島は伊達宗城なり。○五 阿部伊勢守 名は正弘、少くして老中となり、安政四年に卒す。○六 同 總標 一般に用ゐる。○一八 老らか おどなしやかなる意なり。○九 同 ざればみ しやれて、意氣なるをいふ。○一九 けざ やか 著しく目に立つこと。○二 同 ことやう 異様に、普通と變りたるをいふ。○三 同 あやまの家 奇異なる。○二一 かりやす 山中にある草なり、莖葉すすきに似て小なり、莖さ四五尺に至る莖葉を煮て、黄色の染料とす。○

同 **はぐさ** 水田中に生じて、稻の生長に害ある草にして、エノコロ草の類なり ○二四 **令名** 評判のよき名 ○二六 **をさ**

をさ 大方大抵の意なり ○三七 **一神垂跡** 二神は伊弉諾・伊弉册の二尊をいふ。二神の地に天下りましまして、跡をたれ給ひしをいふなり ○四七 **足をはかりに登り志に** 足をかぎりに登りしをいふ ○五〇 **山法** 山の

て ○同 **江府中** 江戸中なり ○五二 **物のあいり** あるいは、あや目に同じ ○七 **目くる**

めき 目がまはることなり ○五三 **いろせ** 兄のことなれど、兄弟通じて用ゐるなり ○五四 **師** 本居宣長を指せり ○

五六 **心志らひ** 注意すること ○五七 **こよなう** この上なく、又このほかに ○六〇 **白拍子**

元、舞の名なりしが、轉じて遊女のことをいへり、この舞はじめは、鳥羽院の頃に、島の千歳和歌の前の二人の遊女、舞ひ始めたりともいひ、或は通憲入道作りて、磯の禪師に舞はしめたりともいへり、水干に立烏帽子、白袴券をさして舞ひしかば、男舞といへり ○六一 **起請文** 二心なき由を宣誓する文 ○六五 **雑**

色 ザフシキ、中間、足輕等をいへり ○六八 **吉野山みねのじら雪ふみわけて** の

歌古今集冬、壬生忠岑、三吉野の山のしら雪ふみわけて、入にし人の音つれもせぬとあるを本歌として、上下を少し改めて、義經を慕ふ意をよみ出でたるなり ○五 **しづ**

づやしづしづのをだまき 伊勢物語に「古のしづのをだまき、くりかへし、昔を今に、なすよしもかな」とある、初五文字を改めて、同じく義經を思ふ情を歌へるなりしづのをだまきは、倭文の字環にて、しづ布を織らむ料の卷子なりくりかへしといはんため、の序なり一首の意は明かなり ○

同 **一〇 覽裳羽衣の曲** 樂史太真外傳覽裳羽衣曲者是玄宗登三鄉驛望女几山所作也、白樂天詩注此曲乃開元中西涼節度使楊敬述所造、鄭愚津陽門詩注、葉法善嘗引上入月宮聞僊樂及歸但記其半、遂以宮中笛寫之、會楊敬述進婆羅門曲與其聲調相符、遂以月中所聞為散序、用敬述所進為其腔、而名覽裳羽衣曲、一說上與羅公遠、望夜遊月宮、聆天樂、名紫雲曲、上獻記其聲、歸而作此曲、後安祿山以燕叛、此曲遂亡、唐人詩云、漁陽鞀鼓動地來、驚破覽裳羽衣曲 ○六九 **行雲を止**

め 林木を動しべし 列湯問篇云、薛譚學謳於秦、青未窮青之技、自謂盡之、遂辭歸、秦青弗止、饒於郊衢、撫節悲歌、聲振林木、響遏行雲、薛譚乃謝

求反、終身不敢言歸 ○七 **纏頭** かづけもの、俗にはなといふ ○八〇 **鑿鼓** 子ウパチ佛家の樂器、圓くして皿

て、聲を發せしむ ○七 **庵大** バウダイ、庵ハ大の意なり ○八三 **庠序** 孟子滕文公篇に曰く、庠者養也、校者教也、序者射也、夏曰校、殷曰序、周

三十五

曰摩學則三代共之皆
所以明入倫也。とあり。

○八五

上杉治憲

米澤の城主なり天明五年老を請ひて鷹山
と號す文政五年三月卒す時に年七十三

○同 **細井徳民**

尾州侯の儒官、姓は紀、平州と號す享和元年六月卒す、米澤
侯の賓師となり、其の國に留ること一年、教化大に行はれき

○同

彬彬

盛なる貌

○八六

稗官

紙小説をいふ。

○蕩散

心とろけ氣
の散ること

○八八

クのビシヨツプ

ヨークは地名、ビシヨツ
プは教會の監督なり

○九五

東大寺

聖武天皇の
創立にして

奈良にあり、有名なる奈良
の大佛を安置せる寺なり

○九六

榮西

備の中州青備津宮の人、仁安三年、商船に乗し
て、宋に至り、大に禪學を修め、歸りて禪宗を弘

む、建保三年七
月五日歿す

○同

久我通親

性は源、太政大臣雅實の曾孫、内大臣雅通の子なり、後
白河より土御門に至る七朝に歴事す、その養女在子、

後鳥羽の寵を受け、土御門帝を生む通親外祖を以
て、政を專にす、建仁二年十月暴に薨す、年五十四

○九七

安心立命

宗教を信じ
て、未來の安

心を得る

○同

源空

姓は漆氏、作州稻岡の人、父の名は時國、母は秦氏、年十五出家し、遂
に高僧となり、專淨土專念の宗を唱ふ、建歷二年正月化す、壽八十、

○同

六時禮讚

晝の三時、乃、曉と日中と、日没と、夜の三時、初・中・後の六時なり、その間
斷なく修行するを、六時禮讚といふ、禮讚は讀經にも、坐禪にも通す

るな

○同

親鸞

本願寺の開基なり、皇太后宮權大進九條有範の子なり、幼にして父を
喪ひ、叔父範綱に養はる、後、法然の弟子となり、練空と號す、常に僧侶が

肉食妻帯の自由を禁ずるを思へ、六角堂觀音の夢想に託して、新に一向宗を作り、自藤原
兼實の女を娶る、弘長二年十一月廿八日歿す、年九十、明治に至り、見真大師と追諡せらる

○同

日蓮

姓は三國、貫名左衛門重忠の子なり、母は清原氏、貞應元年二月十六日、房州
長狭郡取川村に生る、年十八削髮す、後、法華一派の宗門を立つ、又、安國論を

著はして、諸宗を謗る、弘安五年
十月十三日池上宗仲寺に歿す

○九八

大手搦手

城砦の表門を大手といひ、裏門
をからめ手といふ、されば、大手

搦手の軍勢といふは、先
陣後陣といふか如し

○同

垣楯に搔き

垣楯とは、かきならふべき楯にて、疊楯
なぞいふ類なり、かきはならべたつる

こと

○九九

逆茂木

棘木の枝の、鹿角の如くなるを逆立てて、
垣に結ひて、敵の兵馬を障ふるものなり

○同

鎌倉殿

源

朝を

○一〇〇

滋藤の

心とさめきて、我れこそ軍功を立てめと、
勇み立つ心の、色にあらはるるを云ふ。

弓

重藤とは、藤をしげくつがふ故の名なり、藤の長一寸計、間を五分計置きて、つがふな
り、藤の数は廿八にも、三十六にも、三十三にもつがふべし、弓は黒く塗りて、藤は白き

ままにて

○同

木蘭地

モクランヂとも、ムクランヂとも云ふ、黄赤にして、少しく黒
みを帯びたる色の地なり、即、黄椽色なり、その地色の、鍍直垂

なり。○同 小中黒の矢 鶯の羽の上下は白くして、中程に小さき黒色ある者にて、作きたる矢をいふ。 ○同 練鐔 牛皮

りて、作りたる鏢をいふ。○同 褐の直垂 カチンの直垂、褐色は藍をこくして、紺よりも猶こく黒くなりたるをいふ。古歌に「我戀は、しかまのかちに

あらねども、あひそめてより、こさはしらるれなごどよめり。古播磨の國、飾磨郡、印南野の里にて、かち色をよくそめける故、しかまのかちとて、名物にて有りけり。これは、その褐色のひたた

れなり。○同 小櫻を黄に返したる 小櫻革とて、藍地に白くちひさく櫻の花形を染め出したる革を、黄に染め返

したる者にて、威したるをいふなり。しかする時は、地は自から萌黄色になり、櫻は黄になるなり。これは、革威計にて、糸威にはなし。○同 笛籐の弓

笛の如く、弓を黒く塗り、籐だけ ○同 石打の征矢 鶯の尾の羽の、左右の端より第一

ふ。この羽にて、矧きたる征矢にして、大將の用ゐるものなり。又征矢とは、野矢に對してい

ふなり。野矢は、獸獵に用ゐる矢なり。粗製にして、定まれる法なし。羽なごも、端を切らずに

作くなり。征矢は、然らず、軍陣に用ゐる矢なるを以て、製法も一定せり。 ○同 噴物造 いかめしき製 ○同 黄覆輪 鞍の前輪、後輪を、金の薄板にて、縁取りたるをいふ。

○一二〇 二段 凡三十間ばかりなり。 ○同 金に渡し 尺度の如く、眞

直に馬を渡すなり。○一三〇 右兵衛佐殿 源頼朝を指す。

六の巻

二頁 むげに一向に ○ 全 北の陣内裏の北にある、朔平門のことなり。一に縫殿の陣ともいふ。 ○ 二 殿

守のとももの御奴主殿寮の下司にて、禁中を掃除する役なり。 ○ 三 奉行の藏人紅葉山の監督を命せられたる藏人。藏人は藏人所の職名なり。 ○ 七 執し思しめされつる熱心に深く思し召しつるなり。 ○ 四 林

間酒を暖めて送王十八歸山寄贈仙遊寺會於太白峰前住。數到仙遊寺裏來。黑水澄時潭底出。白雲破處洞門開。林間暖酒燒紅葉。石上題詩掃綠苔。惆悵舊遊那復到。菊花時節待君廻。白氏文集第十四卷にあり。 ○ 九 勅勘主上の御勘氣に觸れて、おどがめを受くると。 ○ 五 弘安に時

うつりて世の中移り變りて、後深草天皇の皇子、伏見天皇御即位になりて、龜山・後宇多の政權を失ひ給ひしをいふ。 ○ 六 告文神祇に誓ひて、

異心なきよしを記萬病回春指南に、鶴膝風は、兩膝の内外皆腫したる起請文なり。 ○ 七 鶴膝の御病痛して、虎の咬狀の如く、寒熱こもこも作り、股漸細小にして膝いよいよ腫大になるをいふ。と見えたり。 ○ 七 ゆゝしき稽古の君稽古とは古を稽ふる心にて、學問を云

ふ。甚しく學問のわるか方様といふことなり。 ○ 九 記録所禁中にて、諸人の訴訟を判斷せらるる所なり。後三條院延久中、創設せられ其の後、鳥羽後白河の朝にも ○ 五 公家のふるき御政鎌倉幕府の起る以前、政權、全朝廷にありしことをいふなり。 ○ 九

そばそばよそよそしく、御中のあしきなり。 ○ 一〇 いふがひなきこといで來にいふも詮なき事、いまいましきこといふがごとし、これは、勅命を奉じて、事に與かれる者の中に、捕はれて鳥流にさるる様などが出來せしをいふ ○

全坊皇太子。 ○ 一 思の外の事出て來て主上をはしめ奉り、供奉の上達部まで、悉、武士の手に渡れる、意

外の出來事の起れるをいふ。 ○ 九 六波羅とて承久よりこなた六波羅は鴨川の東、五條六條の間にあり、承久の亂に、北條泰時弟時房と共に、南北六波羅に入りしより、京師を鎮撫せむが爲に、一族を探題として、世世ここに居らしむるとなれり。 ○ 一二 上達部

三位以上の公卿を云ふ。 ○ 全 上のおのこ殿上人 ○ 全 東宮光嚴天皇なり。 ○ 四 御子達も

あなたかあなたにうつされ御子達は後醍醐天皇の皇子をいふ。尊良親王は土佐に、宗良親王は讃岐に、恒良親王は但馬

にうされ給へり。○一三 癸酉の春 元弘三年二月なり。○一四 上皇新主 上皇は後伏見花園の兩院新主は光嚴

院也。○一四 藤原親光 結城宗廣の子はしめ元弘の亂に北條高時に從ひしが、護良親王の令旨を得て、順逆の理を覺り歸順せり。○一四

源高氏 足利高義家義國 義軍義房政義政氏基氏朝氏義貞 義康義兼義氏泰氏賴氏家時貞氏高氏 義國が孫なり

し義氏は平義時朝臣が外孫なり 系圖に示したるが如く、義氏は義國の曾孫なり。ここにただ孫のみあるは誤なり

り又義氏の母は北條時政の女にして、義時の女に非ずされば、義氏は時政の外孫にして、義時の外孫に非ず。或は時政の女を、義時の養女として、義兼に嫁せしや明ならず。

○一五 おしすゑ 〇六 眞見 神佛の見をなはして、眞附をたれ給ふこと。〇一六 源義貞 新田義貞なり、符契を合する 符契は割符のことにて、中合する意に用ゐたり。〇一八 本

の宮 二條宮小路の里内裏なり。〇二〇 源顯家 村上天皇の皇子具平親王の後北畠准后親房の子なり。〇四 吏途 國

の吏務 〇全 藩屏 周圍にありて、内部を衛る義にして、即朝廷の屏障となりて、守護し奉れどなり。〇二一 罷申の儀 國

をいふ。〇八 拜舞退出云云とあり。〇五 御子を一所 義良親王、後に後村上天皇と申奉る。〇五 建武乙亥の秋の頃 建武二年七月なり。〇八 〇〇ありて鎌倉にわはしましけるを

ば 護良親王、鳳に足利尊氏の奸悪を知り、天皇に奏して、之を誅せむとせられしが、尊氏之を知り、天皇の寵姫藤原康子によりて、親王を讒し、遂に鎌倉に流し、直義之を二階堂の土窟に幽囚し奉れり。北條時氏の亂の時、直義洲邊伊賀守をして、之を弑し奉らしめり。〇二三 權大納言公宗 西園寺公

の先代公繼、承久亂に北條氏に意を通じたるを以て、其の後援によりて、外戚となり、累代太政大臣に登れり。北條氏亡ぶるに及び、西園寺家又その勢力を失へるにより、公宗北條時興を輔けて、舊業を回復せしめんことを謀り、建武二年六月己が北山の第に天皇の臨幸を仰ぎ、新に浴室を造り、浴板を設け、下に刀の箆をうゑ、以て天皇を弑し奉らむとせしが、事現れて捕へられ、出雲に流さるることとなりしを、急に又誅せ

られし由、太平記卷の十三、北山殿謀叛の事の條に委しく記せり。〇二三 七代 公經、實氏、公相、實兼、公衡、實衡、公宗 〇七 戚里の寄 母方の里を云ふ。實氏は後深草龜山二帝の外祖、公衡は光嚴院の外祖なり。〇九 全 あら

の任國へ赴く時、參内して御いとまを申す儀なり。禁秘御鈔、帥大貳受領赴國の條に、帥大貳赴任、上古必參内、召弓場殿給酒肴、次召御前給祿、伴祿白褂一領、御衣一襲也、或給御衣計、彼時、召南廊小板敷給祿。〇五 御子を一所 義良親王、後に後村上天皇と申奉る。〇五 建武乙亥の秋の頃 建武二年七月なり。〇八 〇〇ありて鎌倉にわはしましけるを

の任國へ赴く時、參内して御いとまを申す儀なり。禁秘御鈔、帥大貳受領赴國の條に、帥大貳赴任、上古必參内、召弓場殿給酒肴、次召御前給祿、伴祿白褂一領、御衣一襲也、或給御衣計、彼時、召南廊小板敷給祿。〇五 御子を一所 義良親王、後に後村上天皇と申奉る。〇五 建武乙亥の秋の頃 建武二年七月なり。〇八 〇〇ありて鎌倉にわはしましけるを

の任國へ赴く時、參内して御いとまを申す儀なり。禁秘御鈔、帥大貳受領赴國の條に、帥大貳赴任、上古必參内、召弓場殿給酒肴、次召御前給祿、伴祿白褂一領、御衣一襲也、或給御衣計、彼時、召南廊小板敷給祿。〇五 御子を一所 義良親王、後に後村上天皇と申奉る。〇五 建武乙亥の秋の頃 建武二年七月なり。〇八 〇〇ありて鎌倉にわはしましけるを

の任國へ赴く時、參内して御いとまを申す儀なり。禁秘御鈔、帥大貳受領赴國の條に、帥大貳赴任、上古必參内、召弓場殿給酒肴、次召御前給祿、伴祿白褂一領、御衣一襲也、或給御衣計、彼時、召南廊小板敷給祿。〇五 御子を一所 義良親王、後に後村上天皇と申奉る。〇五 建武乙亥の秋の頃 建武二年七月なり。〇八 〇〇ありて鎌倉にわはしましけるを

の任國へ赴く時、參内して御いとまを申す儀なり。禁秘御鈔、帥大貳受領赴國の條に、帥大貳赴任、上古必參内、召弓場殿給酒肴、次召御前給祿、伴祿白褂一領、御衣一襲也、或給御衣計、彼時、召南廊小板敷給祿。〇五 御子を一所 義良親王、後に後村上天皇と申奉る。〇五 建武乙亥の秋の頃 建武二年七月なり。〇八 〇〇ありて鎌倉にわはしましけるを

はならぬ法令

名例律に凡六議者犯死罪皆條所坐及應議之狀先奏請議議定奏
議賢謂有三大議能謂有三大議功謂有三大議貴謂有三大議位謂有三大議故謂有三大
議賢謂有三大議能謂有三大議功謂有三大議貴謂有三大議位謂有三大議故謂有三大
なれば六議の内の議親議貴の項によりて罪を減ずることを得ると其の吏員の直に誅
せしはあまりなる仕方
なりとの意を含めり。○二五 日吉の社 日吉山王社は比叡山の守護神にして東坂
本にあり本社七座攝社十四座凡二十一社
なり例祭四月中申日大宮大己貴命本地釋迦二宮國常立尊・樂師・聖眞子(正哉吾勝尊・阿彌
陀・八王子(國狹稚尊・千手觀音・客人(伊弉册尊・本地十一面觀音・十禪師(瓊瓊杵尊・地藏・三宮
根尊又豐樹淳尊・普賢)
以上七社(攝社は略す) ○二六 江 琵琶湖 ○二七 勸賞 ケンシヨウ、たい賞といふに
れば勸賞と ○二八 山門 比叡山の延 曆寺をいふ。 ○二九 なほゆく末をおほしめす
は云ふなり。 ○六 道ありしにこそ 行末を思召す御深慮ありての事よとなりこの時に當り賊勢ま
ばらく時の至るを待ち給はむの御慮にて内内義貞に北國經營 ○全 東宮 恒良 ○
の計を授けて御遣しありて御自は都に還幸ましまししなり。 ○全 親王は儲君に 此の時前東宮恒良・成
全 尊號の儀 太上天皇の尊號にし て、即上皇の御事なり。 ○九 正成といひしが一族 楠正行和
田正朝等

道ありしにこそ

行末を思召す御深慮ありての事よとなりこの時に當り賊勢ま
ばらく時の至るを待ち給はむの御慮にて内内義貞に北國經營 ○全 東宮 恒良 ○
の計を授けて御遣しありて御自は都に還幸ましまししなり。 ○全 親王は儲君に 此の時前東宮恒良・成
全 尊號の儀 太上天皇の尊號にし て、即上皇の御事なり。 ○九 正成といひしが一族 楠正行和
田正朝等

○三〇 在位の儀にてぞ

先に後醍醐天皇山門より御還幸のみぎり尊氏太
上天皇の尊號を奉りし事前文に見えたるが内侍
所も神璽も御身に隨へ給へれば矢 ○全 國國にも御志あるたぐひ 越
張御在位の儀にてましますとなり。 ○五 國國にも御志あるたぐひ 越
には新田義貞瓜生保等河内に楠氏筑 ○三〇 戊寅の春 延元三
紫に菊地氏伯耆に名和氏等ありき。 ○八 年なり。 ○三二 和泉
の國石津 太平記・吉野拾遺等には阿部野とあり梅松論には顯家は五月 ○三二 空
二十一日高師直と泉州界浦に戦ひて討死せる由記したり。 ○二

しくさへなりぬ

義貞自赴き助けむとし道に賊軍に
逢ひ流矢に當り自刎ねて死せり。 ○全 親王は儲君に 此の時前東宮恒良・成
る所となり給ひしかば更に義良 ○三五 こはく 勢の強 全 奥州野州の
親王を東宮に立て給ひしなり。 ○四 守 顯信之を補佐せり。下野守には左中將道世任せられき。 ○三六 仲尼は獲麟
守 與國元年故護良親王の御子陸奥親王陸奥守となり北畠
顯信之を補佐せり。下野守には左中將道世任せられき。 ○三六 仲尼は獲麟

に筆を絶つ

仲尼は孔子の字なり孔子春秋を著して魯哀公十有四年春西狩獲麟と
かきて筆を收めたり又人の臨終を獲麟といひなすにより天皇崩御の

條にて筆を措くべき ○三七 左大臣 藤原經 思なり。 ○四一 大嘗祭 天皇位に即きたまひて、天神地祇

を祭らせたまふ大祀にして、古は大嘗或は新嘗ともいひて、其の別あらざりしが、天武天皇以來代毎に行ふを大嘗とし、年毎に行ふを新嘗とす。其の日は、十一月下卯を用ゐる祭儀は悠紀主基の國司、專之を行ふ。悠紀は ○四一 庭燎 にはひは、庭にてかがり、庭燎をたぐことなり。 ○四二 御

直會

オンナホヲヒ、新嘗の御親祭をはりて後、主上神嘉殿の内にて、采女の御配膳にて、御酒肴をきこしめす御儀なり。普通の神社にていふなほらひは、祭はてて後神に供へし御酒肴のふるしを、神官

齋藤彦麿

齋藤彦麿通稱は可憐華假庵、又宮川舎と號せり。石州濱田の城主周防守の藩士にして、明和五年に生れたり。幼時江戸に來り、濱町の藩邸に住めり。學を伊勢貞丈本居宣長にうけ、傍山東京傳につきて、其の文筆を磨きぬ。天保年間、藩主事ありて、奥州棚倉に徙さる。彦麿も從ひぬ。安

政元年享年八十七にて、棚倉に歿しぬ。 ○四三 加藤千蔭 橘千蔭は歌人なり。芳宜梨山人、逸樂窩江翁等、皆其の別號也。技直の子にして、眞淵に學ぶ。通稱又左衛門家世世江戸の興力にして、八丁堀に住す。專古風の歌學を唱ふ。また書を能し、松花堂を慕して、一家の風をなす。文化五年歿す。歳七十二。著す處、萬葉集略解、萬葉新採百首、香取日

記、宇氣羅可花、行加飛婦里、大歌御歌記、新百人一首、月並消息、古今序考等なり。 ○全 安

田躬弦

安田躬弦は、江戸の歌人なり。粟本と號し、一巻と稱す。 ○四三 本居宣長 文化十三年正月五日歿す。深川寺町慧然寺に葬る。 ○六

勢州松坂の人なり。姓は平、父を定利といひ、權大納言頼盛の後裔なり。今を距る事殆百六十年、享保十五年五月をもて生れたり。幼名を小津富之助と呼び、名を榮貞、字を彌四郎、又、健藏といひ、廿二三歳の時、家號小津を廢して、本居に復し、その後兩三年を経て、名を宣長、字を春庵と改めぬ。齡五十を過る頃より、家の名を鈴の屋と號せり。享和元年人人の請に任せて、京都四條の烏丸の東に寓せしかば、古典に志あるもの、續續諸國より慕ひ上りきといふ。門人すべて五百人。其の門下よりいでて、名を成すもの、また抄からず、かの平田篤胤の如きも、また没後の門人なり。この外、當時の聲聞、繪師も、皆其の名を開き、或は殿内に召し、或は寓舎を訪ひて、その講話を聴き、和歌の添削を囑するもの、絶えざりきとぞ。同年六月松坂の家に歸り、九月十八日不圖病に罹り、同廿九日曉に没しぬ。享年實に七十有二歳なりき。子春庭、婿大平等を經、子孫は其の學派を襲きて、今も世に聞ゆ。 ○

眞名譽

マンナツンボ、漢字の音を借りて、和語に當てて用ゐる者を、片假名平假名に對して、眞名といふを以て、カナ譽に對して、眞名譽としやれたるなり。 ○四四

聞えぬ歌をよみしむくい

聞えぬは、わからぬといふ意なり。さて聞えぬ歌をよみし報に

て、我が耳はかく遠くなれるなり。 ○全 八 かくすし 醫者 〇四五 むらい 無禮といふるべし。といふ俳偈の歌なり。

○ 四六 掀翻 キンホン吹 ○ 四七 瑟瑟 シッシツ秋冬の風の音の形容 ○ 全 颯颯 サツサツ秋の風の音

容 ○ 四八 豨突 チトツ豨とは豕又は猪をいふ。わき見もせず突き進むをいふ。 ○ 全 顛躓 テンチ、つまづきまるぶをいふ。 ○

九 逼蹙 ヒヨクシク、せま ○ 五三 陣陣 風の吹 ○ 五五 颯颯 グヘウツ ○ 五九 だずまひ 子 ○ 九 峨峨 巖の峻しく聳えたる形容 ○ 五七 羅衣 うすぎぬ、絹又紗 ○ 四

文覺上人 俗名は遠藤武者盛遠十八歳の時誤て源渡の妻袈裟を殺し悲哀禁するこ 高雄山神護寺に住せり。 ○ 六〇 大隅の國の瀧 大隅國加治木の北にありて龍門の瀧といふを指せる也

○ 八 廬山の瀧 廬山は即洞庭之山なり山の東南にありて香爐山とし西南にありて石門山といふ瀑布は石門山にありて白樂天が疑是銀河

○ 六一 其の女 園女は勢州松坂の産にして祠官渡會氏の女なり。備前の人岡西惟中の妻となり難波に住み元祿二

○ 全 秋色 姓は大目氏名はか

○ 全 智月尼 近江大津の俳人なり乙州の

○ 全 上 すすて女 丹波柏原山里の人聰敏にして才あり甫めて六歳句を吟して曰くゆきの朝二の字二の字の下駄のあと

○ 全 千代女 加州松任の人表具屋某の女後尼となりて素園と號す。廬元坊の門人なり廿五歳にして夫死す即一人の男子をして家を嗣がしめ已は尼となりて別居し風流自娛む安永四

○ 全 井の端の云々 井の端の櫻のうらはしく咲き出でたるを酒に酔ひたる人の立ちよ

○ 全 朝がほに云々 朝起きて水を汲まむとて井戸端に行き見しに朝顔

○ 全 六五 さきた、ぬくいの八千度 かば、を切ることの惜しければ水を汲まずして貰ひて歸りしとなり。

○ 全 六五 さきた、ぬくいの八千度 云々この歌は古今集の哀傷の部に載せたる歌にて一首の意は八千度後悔しても流る

○ 全 六五 さきた、ぬくいの八千度 水、の歸り來ぬか如く、甲斐なしとなり古語の後悔不立前流水不還源とそふ本文に付

○ 全 六五 さきた、ぬくいの八千度

○ 全 六五 さきた、ぬくいの八千度

○ 全 六五 さきた、ぬくいの八千度

○ 全 六五 さきた、ぬくいの八千度

○ 全 六五 さきた、ぬくいの八千度

て、よめ
るなり。○六六 男子五人 西木戸太郎國衛・泉冠者素衛・泉三郎忠衛・木吉 ○六七

作物 サクモノ、名工の作れるもの。○七二 嫡公主 支那にては、皇女を公主といふ、嫡は嫡妻の腹に生れたる長子といふ。○七五

情蜂 男の蜂の稱。○全 工蜂 中性にして、蜜を醸し、巢を造る等、働く蜂をいふ。○七六 穆如 ボクジヨ、威儀の美盛なる貌。○

五 兀立 コツリツ、兀は動かざる貌なり。○全 鼓翅 コシ、翅をならすこと。○七九 渙然 クワンセン、解くる貌。○

八一 無聊 プレウ、たいくつ。○全 悍然 勇ましき貌。○八二 予遣 ゲツ非遣、るもの。○全 肆然 シセン、なる貌。○

○八三 はかばかしく 整然の意、俗語のチヤントのと。○八四 帷幄 非アク、陣屋に張る幕。○全 陣

平張良 共に智謀に富み、漢の高祖を輔けて天下を一統せしめたる者なり。○八五 舍弟の七郎 正成の弟にして、はじめ

正氏といひ、後、正季と改む。正成と同じく、湊川に戦死せり。○全 矢間 ヤザマ、櫓や城など、矢を放つ爲に、おけて

ある小窓なり。○全 鏃を支へて 敵の鏃を支へて、當らぬ様にすることなり。○八七 魚鱗かかり 隊

密接して、魚鱗の如く、重なる陣法をいふなり。○八七 三の木戸 古は城門、城戸皆キドとよめり。三つの城の門なり。○全 あふ

れども進まず あふるは、馬の鎧を踏張りて、泥土を煽り立つるをいふ。○八八 物具 具足。○全 徳つき

てぞ 東國の兵士ども、足の踏所もなきまで、馬物具を捨て置きたれば、所の者ども皆捨ひとりて、俄に利益を得て、有福になりし様に見えたりとなり。○全

吐田・檜原 ハンダ、ナラハラ、共に大和の地名。○八九 後攻 ゴゼメ、後に扣へたる兵。○九五 逆木 サカモギ、棘木の枝の鹿

角の如くなるを逆立てて、垣に結ひて、敵の兵馬を障ふる者なり、築城記に、土居に逆木を結ぶには、杭を打ち、横木を結び、それへ折かけ結ぶなり。又陸地に結ぶは、竹の先を腰の邊

にある程に、本に低く杭を打ち、横木を結ぶ由見えたり。○全 稻麻竹葦 數多く充満すること。○九一 目ばかり

りはたらく 目ばかり、バチバチして居るをいふ。○九二 平城 平地にある城をいふ。○九三 責具足

攻道具の○全 持楯 モチタテ、また手たてとも云ひて、矢を拒ぐ具にて、椽木にて造り、楯の裏に柄を付けて、持つに便にせる者なり。○九四

甲の天返 ガブトのテヘン、甲はヨロヒと讀むべきを、太平記には、往々ガブトに用ゐたるは、誤れるなり。ガブトは胃の字を用ゐるべし。さて、ガブトのテヘンと

は胃の息出穴
 の所をいふ。○全 綿がみ 肩となり、肩をワタと積むなり、甲の肩に當る所にて、雨の袖をつくる所なり。○九四 矢庭 和訓彙に急遽を矢場といひ、又矢庭ともかく。○三八 篠を衝くが如し 篠は小さく細き竹、しのを衝くは降。○全 窳溟 エウメイ、くらきと。○全 毘城皆帷幕を低る 字彙者撚毛、席也、通用旃、俗作氍毹非也、毹城者謂陣營也、綱目にあり、餘の大雨に、何れの陣營も、皆帷幕をたれて、守備を惰りたるなり。○一〇〇 箬 矢の頭の所をいふ。○全 傷 名、文休。○一〇一 尋常に死にたる者かな 天晴武士らしく、立派に死せることよ、と嘆賞したるなり。

七の巻

一頁 三枝の禮反哺の孝 雌に鳩に三枝の禮あり、鳥に反哺の孝あり、といふことあり。これは、鳩は枝に止るに、必上に父鳥、次に母鳥

次に子鳥と、順正しく止りて、決して子が父母より高き枝に止まることなしといふ。又、鳥は親鳥老に及べば、食を求めて之を養ひ、恩に報ゆといふ。○二 爛熳

うるはしく、かがやけるをいふ。○全 隱逸の姿 俗を離れて、高潔なる風姿をいふ。○五 五倫五常 五倫とは父子の親

君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、これなり。五常とは、父義、母慈、兄友、弟恭、子孝、ともいひ、又、白虎通には、仁義禮智信をいふとあり。○四 漢の蔡邕

が女誠 女誠は、女訓の誤なるべし。五種遺規の内に收めたり。本文とは、較異れり。○六 にごやか やはらか、柔和のと。○す

ぢわかれんことを思ふべし 心の條、理正しく、亂れざる様に注意せよとなり。○七 外宮

ダグウ、豊受大神を奉祀す、雄略天皇の二十二年、秋七月、土佐佐命を遣し、丹波の與佐真井原に鎮座ましませる、豊受大神を奉して、九月之を伊勢渡會の郡山田原の新宮に祀りたまふ由、鎮座本紀に見えたり。○八 神さび 神神しきさまなり。○六 内宮 天照大神を祀る。書紀の垂仁天皇廿五年の條に曰く、三月

丁亥朔丙申、雖天照大神於豊相姬命、託于倭姬命、爰倭姬命、求甕座大神之處、而詣菟田筱幡、更還之入近江國、東廻美濃、到伊勢國、時天照大神誨倭姬命曰、是神風伊勢國、則常世之浪重、浪歸國也、傍國可憐國也、欲居是國、故隨太神、其祠立於伊勢國、因興齋宮、千五十鈴川上、是謂磯宮、則天照大神始自天降之處也、とあり。 ○御手洗の川

水 ミタラシの川水は、即 ○全 うな手つきつつ云云 頂を下げて、手をつきて拜するをいふ。

○九 何かしの法師 西行法師 をいふ。 ○全 なにごこの云云 なにごこのおはしますかばしら

ねども、かたじけなさに、涙 ○全 おぼめき ボンヤリ、ほのめかす。 ○一 ○神風の云云

こぼるるをいふ歌なり。 ○全 神風の云云 神風は伊勢の枕詞なり。内宮外宮の神様が礎を固めて立てられたる御代は、内外の宮の宮柱の動かぬか如く、決して動くことおらじとなり。 ○全 神代

より云云 神代の昔より、枯るることなく、大く茂りたる杉に、夏の日影をささへて、涼さがあまりてある、今日のこちよさは限なし、といふ意なり。 ○

一三 よべ 昨夜 ○一四 羅山先生の植ゑられたるなり 上野山の山王祠より、清水觀

に至る、數千畝の地は、林羅山の賜莊なり、春齊の櫻峰記に曰く、櫻峰者何也、忍岡別號也、滿岡之櫻、先考之所栽也、據此、則今所存老餘、數十章、蓋其遺植也、云云、羅山姓は林、名は忠、一の

名は信勝、羅山はその號なり、長ずるに及びて、英邁絶倫、曠世の才あり、最六經を尊び、銳意洛閩の學を興すを以て、自任七門を開き、徒を聚めて、四書新書を講説す、徳川家康その名を聞き、慶長十一年召して、博士となし、以て顧問に備ふ、後、薙髮して、道春と稱す、四世に歴任して、明歴三年正月廿三日歿す、年七十五。 ○秋色櫻 秋といへる少女の井の端の櫻あふなし、酒の酔と吟せしより、其の櫻に負せし名なり。 ○一四 西湖 錢塘湖、周繞三十里、三面環山、以其負郭而西、故稱西湖、と讀書紀數略に見ゆ。 ○一五 まさや かきり ○全 都ぞ春の錦なりける 古今集

に、花ざかりに、京を見やりてよめる、素性法師、見渡せば、柳さくらを、こきませて、都ぞ春の錦なりける、とある歌なり。 ○中堂 寛永寺の中堂なり。 ○ したたかなりしこと 壯大なり ○一六 菘鬱 ヲウウツ、樹木の茂り合ひたる様をいふ。 ○ 一六 感應寺 今の谷中の天王寺は、もと感應寺と稱し、日蓮宗なりしが、今を去ること五六十十年前、惡僧ありて、彼の有名なる蓮華往生を以て、愚民をたぶらかしたるにより、事覺れて、誅せられ、寺は夫より ○全 合抱 ひとか ○七 芳山嵐峽 芳山は大和の國、芳野山、嵐峽は山城國の嵐山なり。 ○全 けふのみこ 古今集春の部に、亭子院の歌合に、春のはての歌、躬恒、けふのみと、春を思

はぬ時だにも、たつことやすき花のかけかは、どある歌なり。一首の意は、春を今日ばかりでなく、まだ長くあると思ふ時でさへも、安心して立つて居ることの出来る花のかけがあるか、そふでない絶えず花の散りはせぬか、風が吹きはせぬかと、氣かもむるに、まして、今日は、春も今日がかりと思へば、一しは氣のもむるよしを、なげけるなり。

一七 友とちがり がりは許なり、友達の許へ也。 ○一八 おちる給はぬこさや 王城の鎮

護たる、比叡山延暦寺になぞらへて、東叡山寛永寺を建立すること、誠 一九 本所の 四

に借上の仕方なれば、朝廷にては、心安からず思召されけむとなり。 ○一九 本所の 四

わづらひ 本所は貞永式目鈔に、本所とは領家なり、元來の領主をいふ、どありて、莊園の所有主なり、其の莊園の地頭の非法を、泰時か止めたるなり。 ○

七 陪臣 また家來、北條義時は鎌倉將軍の臣下なれば、陪臣といへるなり。 ○一〇 大名の下に矜る心やありけむ 大なる名譽を自負して、下に誇る心があつたのであらふ。 ○二〇 七代 時政・義時・泰時・時頼・時宗・貞時・高時。 ○二一 天

にせぐくまり地にぬき足し 天は高く且大なるものなれば、いかに背を高くし、肩を張りて歩むも、妨げなき様なれば、矢張丈をちいめて、意張らずに歩くがよく、地は厚く且大なるものなれば、如何に強く踏むとも、壞るゝ者にあらざれども、矢張、足音靜かに行くがよしとなり。これ皆人にはこらず、身

を憚むべきこと 一〇二一 長田狹田 ナガタ、サダとよむべし、記に以稻爲水田種子、をいへるなり。 ○一〇 長田狹田 又因定天邑君、即以其稻種、始殖天狹田及長田。

又天照大神以天狹田長田爲御田なせ見えたり。 ○全 生井榮井 イタ井、サク井、祝詞考に、生井神名式に生井神、清和紀同じ榮井紀にも式にも福井

神とあり、榮福幸なせは、 三 赤松圓心 俗名は則村、世々播磨に居る、元弘の乱に、則村官軍に屬し、屢賊軍を破る。官軍

の京師を復するや、則村勳功最多し。乱平ぐに及び、播磨の守護職に任せられしが、未幾ばくならず、故なくして、職を褫はれ、だた佐用莊を食む故を以て、則村朝廷を憚む。足利尊氏の反するに及び、遂に之に屬し、白旗城に據り

て、以て官軍に抗す、正平五年死す、年七十四。 ○二二三 文觀法師 文觀は醍醐寺の座主にして、官僧

正たり。後醍醐帝北條氏を滅せんと謀るに及びて、文觀及圓觀を延て、北條氏を咒詛せしむ。期に及びて、事泄る。高時人を遣し、文觀等を執へて、鎌倉に致さしむ。至るに及びて、文觀備さに訊掠を被むり、遂に歎するに、誼事を以てす。高時乃、文觀を硫黃島に竄す。乱平らぐに及びて、本寺に還住す。文觀寵を特みて、驕肆財を集め、甲を畜へ己れに媚ぶる者あれば、輒爲めに奏請して、糖賞を枉行す。貪饕黨附する者、幾百なるを知らず。毎に朝に上るに、兵前後に従ひて、路を引く。後、足利尊氏の兵、京師を犯すに及びて、文觀脇屋義助等と、之を山崎に拒く。兵皆脆弱、爭ひ率ゐて出で降る。文觀破れ

て退く。正平十二年卒す。世に小野の文觀と稱す。 ○二二三 邪見法逸 法逸は放逸の誤なり。

○二二三 邪見法逸 法逸は放逸の誤なり。

○二二三 邪見法逸 法逸は放逸の誤なり。

○二二三 邪見法逸 法逸は放逸の誤なり。

因果の理を撥無するを邪見と謂ひ、
修行の道に懈怠するを放逸と謂ふ。

○二四

さがしら 賢だてさが

○九 和人

お前といふ全じ。

○二五 不君に仕へて云々

子游曰事君數斯辱矣胡氏曰事君諫不行則當去とある意なり。

○け

ふまでも云々

今日迄もながらへて居るといへは居る様な者の實にみる甲斐もなき我身を持ちて夢の如き世の中に又はかなき夢を見るが

まじさよといふ心なり。

○二六

燈なく、雪に映し、螢をあつめ、雪に

映じ

たるは孫康にして螢を集めしは車胤なり。孫氏世録曰康家貧、無油常映雪讀書。少小清介交遊不雜、後至御史大夫。晋車胤、字武子、南平人、恭勤不倦、博學多通、家貧、不常得油、夏月則練囊盛數十螢火、以照書、以夜繼日焉。桓温在荊州、辟爲從事、以辨識義理、深重之、稍遷征西長史、遂顯於朝廷。

○全

壁をうがら

壁を鑿ちしは匡衡なり。

西京雜記曰、衡勤學無燭、鄰舍有燭而不逮、衡乃穿壁引其光而讀之、邑太姓文不識、名家富、多書、衡乃與其客作而不求償、願得書遍讀之、主人感歎、資給以書、遂成大學。

○三

書ある家にやこばれ

これも匡衡の事なり

○全

如意輪觀音

七觀音の

一にて、其の像は六臂を具す。人間の祈願に應じ如意ならしむといふ徳より、この名ある者なり。但江州石山寺の像は二臂なり。

○二八

卒都婆

ソ

バ高顯の義なり。佛高顯の者を好むとて、木石にて地水火風空の五層のたかきものを作りて、佛に供す。之を卒都婆といふなり。

○九 調度

諸道具なり

○二九 すさび

なぐさみ

○全 たららの木の芽

たららの木の芽は、形山うるしに似て、ゆでて食用に供すべし。

○三〇 髷にならひて

昔支那に美人あり西施といふ。ある時西施心を病みて、其の里に髷してありしに、海棠の雨になやめるが如く

いと其の美しさの添ひて見えしかば、其の里の醜女、之を美なりと思ひ、亦心を捧げて其里に髷してありしに、其の醜きことたどふるものなかりしかば、富人は之を見て、門を閉ちて出てす。貧人は之を見て、妻子を挈て走れり。彼醜女は、美髷を知て、髷の美なる所以を知らざるなりと、莊子天運篇に見えたり。それより、善悪も考へずして、狼りに人の真似するを髷にならふといふなり。

○三二 百濟の川成

百濟川成、本性は余、其の先は百濟の人なり。武藝に長し、能く強弓を挽き、兼て鬪鬪

を善くす。弘仁十四年、美作權少目に任せられ、後外從五位下に叙せらる。承和中、備中播磨介を歴、姓百濟朝臣を賜ひ、尋で從五位下に進み、安藝介に遷る。時人之を榮とす。仁壽三年八月、○三三 瀧殿の石

瀧殿は京都大覺寺にありしよし、河海抄に見えたり。後拾遺集赤染術門の歌に、大覺寺の瀧殿を見てよみ、侍りける、あせ

にけり、今だにかかる瀧つ瀬を、早くう人は、見るべかりける。とわれは、後一條天皇の頃は、その瀧もあせたりと見ゆ。瀧は世に奈古曾能瀧といふよし、山城名勝志に見えて、公任卿

めの名を方救といふ。通稱爲藏、後總大夫と改む。柳園また榎か本と號す。○全 粟田土満 ひぢまろは遠江の人、縣居の門人にて、岡の屋と號す。文化

八年没す。○全 夏目壘満 みかまろは遠江の人、通稱嘉右衛門、加納諸平の實父、普通は壘磨と書けり。 ○六一 荏弱

○全 天鷲絨の聲 びろろの如く、柔くやさしき聲。 ○全 鋼鐵の意

はがねの如く、強くしつかりしたる意。○六四 心臟を鼓動せしめたり 感動すること甚しければ、從て心臟は劇しく鼓動す。 ○六六 黒雲暗憺たる修羅場 修羅は梵語にて、天のことをいふ。佛説にいへる六界の一、もとアシユラといひ、アハ非すの意にて、阿修羅道といふべきを略して、修羅道とはいへり。修羅場は戰場のことに用ゐる。黒雲の暗くものすこきとは、殺氣充滿せる戰場の形容なり。

○全 一葦帶水 一筋のせまさき水。 ○六九 綽綽 シヤクシヤク、ゆるやかなる貌。 ○全 醞釀 ウンジャ

ウ、かもしつくること。○七一 慘鬱 サンウツ、ものすこく、うつたうしきこと。 ○七六 をちの峯 遠き山のいただき。 ○八

八すのこ 竹を編みて作れる縁のことより、板縁をもすべてすのことよびならへり。 ○八 おどろおどろしう

驚くべく、仰山なること。○九 神 雷のこととなり。 ○七八 病は口より入り禍は口よりいづる 病氣の原因は、食物により、禍の原因は、失言にありといふ意。 ○七八 言さかりて出づ

れは又さかりて入る 大學に曰く、言悖而出者亦悖而入と、さかりては逆ひてなり人を誹れば我も又誹らるゝを誡めたるなり。

○全 鳥羽僧正 鳥羽僧正は畫僧なり、名は覺猷、源隆國の子、少にして東北院大僧正、覺圓に從ひて、弟子となり、遂に天台の座主、法務及三井の長吏、大僧

正となる。曾て醍醐に住し、又鳥羽に居る。故に鳥羽僧正と號す。性剛畫を好み、專、倭畫を善くし、自、一家を作す、人物鳥獸虫魚に至りては、唯、戲事を畫きて、真に意を寫し、更に形似を求めず。其の筆作、一人を驚かす。方今世俗に、戲畫を呼て、鳥羽繪と云ふ。○七 供米不

法 佛様へ供へらるる米に、不都合なることがしてあるなり。 ○八 辻風 つじ風 ○一 院 鳥羽僧正は保延六年、齡八十八歳にて寂し

たれば、この院は白河鳥羽兩院の内なり。○六 比興 この語は時代によりて、其の解釋異なるれども、この時代にては、あさましいといふ意に用ゐたり。 ○

全 四維國界の數里 東西南北の國境の里數、去京一千五百里、去蝦夷國界一百廿里、去常陸國界四百十二里、去下野國界二百七十四

六十五

里とし
るせり。○全 按察使 陸奥出羽に遣し、國司の政の正否を察し、教化風俗の如何を觀せしめ給ふ官。○八一

○八一 惠美朝臣

朝獯

あさかりは、藤原仲曆の子なり。寶字の初め陸奥守となり、尋て按察使となり、鎮守府將軍を兼ね、赦して陸奥に桃生城を造り、出羽に雄勝城を造らしむ。城成る、褒めて從四位下を授く。既にして仁部卿となり、仍、按察使に兼ね、又東海道節度使となり、從四位上に至り、兵部卿となり。六年參議に拜せらる。初、神龜中、按察使大野東人、陸奥多賀城を築く、朝獯任に在りて、碑を建て、道程里數を記す。八年父仲麻呂亂を作して、誅せらるゝに、及び朝獯亦誅せらる。○八一

○八一 歌枕 歌によむ名所なり。○

一〇 はねをかはし、枝をつらぬる契の末も、

白居易の長恨歌に在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝とい

ふ句を引きて、夫妻相契りし末も、皆

○八二

つなてかなしも

鎌倉右大臣の世の中は、常にもか

もな、渚こく、あまの小舟をつなでかなしも、の歌の意なり。かなしもは、面白しどほめ感ずる意なり。海士の小舟の綱手ひくさまの、面白さに、我が命も、常住不斷にして、この面白きありさまを、幾度も見

○全 平家にもあらず

平家物語にも非ず。

○全

九 俣

八尺を俣とい

へき、ここにてはただ

○全

あけの玉がき

玉がきは、神社の圍にある瑞垣なり。あけは朱ぬりをいふ。

○全

神靈あらたか

神威の灼然なること。

○八三 勘文

天文博士が天象を見て、人事の吉凶を勘へたる文をいふ。○一〇

小野宮右大將

藤原忠平の長子實頼なり。御母は寛平法皇の御女天祿元年五月薨す。諡して清慎公といふ。

○全 春日社

天兒屋根命を祀れる、藤原氏の氏神なり。

○全 山階寺

孝徳天皇三年十月大織冠鎌足公の創立せられたる巨剎にして、山城國山科にありしを、後大和

に移さる。今の興福寺これなり。藤原氏の氏寺なり。

○八四

枇杷左大將仲平

仲平は基經の第三子なり。延喜十七年左近衛大將となり、

尋て右大臣に拜せられ、左大臣に轉ず。薨する年七十一、世に枇杷の大臣と稱す。

○法藏僧都

法藏は博學多能の僧なり。唯識三論通せざるなし。天徳四

年維摩の講師となる。安和二年正月三日薨す。

○全

案内つかう奉るに

聞き合せて、見ましたが、

○八五

の御心の定にては

か様の御心持にては、定は心に定めかく法則。

○八六

一家なみしきたる

家が立ならびたるをいふ。

○全

前裁もほどなけれど

家の前なる、うゑごみも廣からずといふ意。

○全

ままいり

新參なり、ここにては、新に放ちたる方の虫をいふ。

○八七

召人

捕はれたる人。

○八八

かうど

いふべき便もなければ

かくかくの次第にて参りたる由をいひ入るゝ便宜なければ

○ 二 中門 正殿

の東西にある長廊下の内へ開きたる往來にて、屋根ありて扉なし。俗に所謂切通なり。但、武家にては、家根なきを用ゐる例なり。

○ 八 九 持佛堂 持佛

又は先祖の位牌など

○ 九 踏皮行纏 タビ、ハバキとよむ。たひは、古皮靴の一種。又單皮ともかく。はばきは、脛に絡ふ衣にして

脚絆に ○ 九 ○ 一 なかなか 却り ○ 九 ○ 一 生を隔てたる、如くにて 此

世ど、あの世ど、隔りて居るか如くなり。 ○ 四 遙に 久しく ○ 一 ○ 人間の事に於ては この世の中の

事 ○ 二 頭燃を拂ふ如くになりぬ

天合三大部補註曰、譬如男女有火燒頭、救令速滅とあり。頭の燒くるを消

す如く世の中の事は全く忘れ果てたる如くなりたるをいふなり ○ 九 二 綿密の工夫 極樂往生の工夫なり。 ○ 五 五 蘊

假成形、四大今歸空、云云

増鏡には、四大本無主、五温本來空、將頭傾白及、但如鑽夏風とあり。五温とは、色受想行識を云ひ、四

大とは地水火風をいふ。五蘊相寄りて、假に形をなしたる我身も、又元の四大に歸りて空しくなるのである。されば、首をもて、白及に當てても、一陣の風を截断すると、更に異なるこ

どなし ○ 二 取る手もたゆく 骨を受け取る手も力なく。 ○ 九 三 勞はるることあ

るよしにて 病氣なる由し披露して。 ○ 九 四 遠侍 古武家の邸にて、中門の傍にある廊の如き處、當番の侍の詰所なり。 ○

九 五 驚きあふ 目を醒して立ちあふと。 ○ 四 左右なく むさう ○ 九 七 たどるた

どる 知らぬ道を、色色と迷ひゆく様なり。 ○ 九 八 山臥 山に臥し野に臥して修行する僧の義なれど、後には、專、修験者の稱となれり。 ○

九 九 かけゆき目 俗にいふ、かは ○ 四 足たゆめは 足が疲るれば。

八の巻

一頁 建禮門院 平清盛の女徳子、高倉天皇の中宮なり。 ○全 一ぞう ぞうはつくの音便にて、一族のことなり。 ○全

時の花をかざしそへて 此の時、平清盛は建禮門院の父にして、二子重盛・宗盛左右大将となり、一族の公卿十六人、殿上人三十餘人諸國受領・衛府・諸司總べて六十餘人、莊園天下に半せるよし、平家物語などに見えたり。まして、其の外孫なる安徳天皇御即位ましまし、まかば、いよく時めきて、榮えにさかへたるを、時の花をかざしそふとは、いへるなり。 ○二 けちえむ 掲焉と書きて、きはやか ○全 またの

年 翌 ○全 さすらへ 浪 ○全 御うまごの宮たち 後白河天皇の御孫、惟明親王及、尊成親王を指 ○全 三の宮 親王 ○全 あなむづかしことて云々 あゝ煩はし

退けたまひてなり。 ○全 故院の兒おひにも云々 故の高倉院のをさなだちに、目つきなど似たまへるが、いどかはゆらしと思 ○三 志る志の御箱 三種の神器の一なる ○全 御このか

召たるなり。 ○四 志る志の御箱 三種の神器の一なる ○全 御このか

み 御兄君 ○全 上下さこそはありけめ 平家にては、上の人も、下の人なり、も、さこそ残念に思ひけめと

なり。 ○全 御禊 大嘗會により、天皇陛下が荒見河に行幸ありて、みそぎしたまふをいふ。又豊のみそぎともいふ。 ○四 大嘗會 の

卷の所 三 神代より云云 八束穂は、幾握もあるは、長く出来たる稻穂の意。しなひは、挽み垂るるをいふ。一首の意は、天照大神

天狭田及長田に稻を殖ゑられたるに、其の稻八束穂にしなひて實りしよし、紀に見ゆ。それゆゑ、この長田村を、天の長田にいひかけて、今日この大嘗會に用ゐむがために、神代より、長田の稻がよく實りて、し 全 およすけて 生立にまさりて智慧づく事 ○

なひ初めしならんとなり。 ○五 月輪關白 藤原 ○全 宜秋門院 諱は ○全 春花門院 諱は丹子、順徳

七 月輪關白 藤原 ○全 宜秋門院 諱は ○全 春花門院 諱は丹子、順徳

るにより、皇 八 人の口にある 人口に膾炙せる ○五 奥山の云云 ね

后宮と名なる。 ○八 人の口にある 名歌ある中に、 ○九 奥山の云云 ね

ろは棘なり、國に道なければ、賢人は山林にかくる者なりといへば、奥山の棘の下まで

ふみ分けて、政道正しき御代なりと、天下萬民にしらしめんと、の意なれど、上句は北條氏の事を下に思召して、のたまへるなるべし。されば、無道なる北條氏の如き者の世に

はびこりをるを追討して、政正しき御代たることを、知らしめたとの御意なり。 ○

六 いごまだしかるへき御事 後鳥羽天皇御年十九にて御讓位ありしは
いまだ早かるべき御事なれどもとなり。

五 全 所せき御ありさま 御究屈なる御有様にて御在位中はすべて
の御儀式の御殿肅にあらせらるるをいふ。○六 全

なかなかやすらかに なかくは却てなりやすら
かは御簡略に御氣樂にの意。○六 鳥羽殿白河

殿 鳥羽殿は山城國紀伊郡白河殿は同愛宕郡
にあり並に白河天皇の造り給ひし所なり。○六 水無瀬
山城國乙訓郡にあり
伊勢物語にある惟喬

の親王の御別荘也。○七 御心ゆくかぎり 思ふまゝ心のはる
るばかりの意なり。○全 世をひびか

して云云 聞く人の驚く程盛遊をしたまふにてあ
そびといふは管絃の遊びをするをいふ。○七 三
とりわきてお上手に 遊ばしたりとなり。○五 見わたせば云云
新古今集に男の子ども詩を作り
て歌に合せ侍りしに水郷春望と

ふことを太上天皇とあり一首の意は夕暮のあはれは秋に限れる者と何しに思ひしや
らむ水無瀬川を見渡せば彼方の山の麓の霞める春の夕暮も哀なる風情は秋に劣るべ
きものか。○全 霞の洞 もと仙人の栖處なるを太上天皇をやがて仙人によそへ
はとなり。○一〇 霞の洞 奉りて其の御所をしかいへり仙洞・仙宮などいふも皆同

し意。○八 あり經けむ 惟喬親王以來あまたの年を経てすみ來しにも舊びずし
なり。○二 あり經けむ て峰の若松は更にわが君の經まさん千年を契るとなり。

○君か世に云云 君の御代にはかく水無瀬川の水をせきとめ庭に引き入れて
その水の流れゆきつつ岩を越す水の玉の數限なき其の數に
は經給ふべき千年もし。○八 一 ばうろく 凡俗の轉なるべし立派やかな
るく見えけるとなり。○一 一 ばうろく らぬわたりまへのつまらぬ様。○八

をこそ者 痴者なり馬鹿氣
たる者をいふ。○九 受領の郎等 國守の家
來なり。○一三 髪おろく

こまたる 髪をふり亂し
たるをいふ。○全 一 一 わおもこ ね前と云
ふに同じ。○全 一 一 万 十郎
祐成 ○全 箱王

はしく立 派なる。○一四 紙障子 今の襖・衝立・障子をす
べて障子といへり。○一六 一 万 十郎
祐成 ○全 箱王

五郎 時致 ○一七 曾我殿 曾我太郎祐信にして
兄弟の母の後夫なり。○全 一 一 上藤一郎 名は祐經伊東
祐次の子なり。

○一七 きりもの 俗にいふきれ
ものに同じ。○九 つばさ 鳥の事
なり。○一八 河津殿 河

三郎祐泰(或祐道又祐茂に作る)即兄弟の父なり祐泰の父を伊東祐親と云ふ祐親は工藤
大夫家次の孫なり姓は藤原父を祐家と曰ふ家次年老いて寡婦を娶る婦に一女あり家

三郎祐泰(或祐道又祐茂に作る)即兄弟の父なり祐泰の父を伊東祐親と云ふ祐親は工藤
大夫家次の孫なり姓は藤原父を祐家と曰ふ家次年老いて寡婦を娶る婦に一女あり家

三郎祐泰(或祐道又祐茂に作る)即兄弟の父なり祐泰の父を伊東祐親と云ふ祐親は工藤
大夫家次の孫なり姓は藤原父を祐家と曰ふ家次年老いて寡婦を娶る婦に一女あり家

三郎祐泰(或祐道又祐茂に作る)即兄弟の父なり祐泰の父を伊東祐親と云ふ祐親は工藤
大夫家次の孫なり姓は藤原父を祐家と曰ふ家次年老いて寡婦を娶る婦に一女あり家

三郎祐泰(或祐道又祐茂に作る)即兄弟の父なり祐泰の父を伊東祐親と云ふ祐親は工藤
大夫家次の孫なり姓は藤原父を祐家と曰ふ家次年老いて寡婦を娶る婦に一女あり家

御堂關白

藤原道長

○全 四條大納言

藤原公任

○三三

朝まだきあ

らしの山の云云

この歌拾遺集には紅葉の錦さぬ人ぞなきとあり又大鏡には

きとあり朝まだきは朝早くなりあらしの山は大井川の岸にある山にて山の名に風の風をかけたるなり紅葉は錦のごとく見ゆる者なれば若るとはいひしなりさて一首の意は朝早く嵐山へ来て見ればいかにも名におへる如く嵐の風の寒むければ散る紅葉を若ぬ人はありませんとはいひてやがて紅葉の散るさまのめでたきをいひしなり

○全 能因入道

肥後守元愷の子にして俗名を永愷といひて長門守に任せられしが後入道して能因と改むその津の國古曾部に住せしを以て

又古曾部入道と云

○三三

あまの川苗代水に云云

四五句より初句へ打かへして見るべしあまの川は天上にあ

る銀河なり無数の星の密に布けるが川の如く長く大空に互りて見ゆる故に銀河とは名づけたるなり苗代水は苗代田にそそぐ水なりさて一首の意は三嶋の明神がまこと天下りたまひし神様ならば天上の事も御心にかなひ給ふべければ今伊豫國にて早りして人民のなげき深ければ彼の天上にありといふ銀河の水をせきかゝるして苗代田にそそがせ給へどて雨を祈りたる歌なり

○三三

御幣

ミテヅラ今字音のままにゴヘイ又幣束などいふ者なり

○全

唐の貞觀

の帝の蝗をのめりける云云

唐の貞觀中京畿旱蝗す稼を食ふこと削るがど

を祀り因りて數蝗を檢して之を呑み祝して曰く寧我が心を食へ百姓を害する毋れとこの夜大雷蝗虫ゆく所を知らず民大に喜べりといへり

○三三

都

をばかすみことにも云云

都はこゝにては京都をさせり白河の關は若代國にて今も其の跡残れり春かすみの立つ

と共に自分も都を出立して旅程に上りしが道路險難にして數多の月日を重ねて白河の關まで來りし時は早秋風吹く頃とはなりたりとなり

○三四

念

なし考の無きなりこゝは都にありながらこの歌を出しては人の感もさま

○三四

五

和泉式部

和泉式部は越前守大江雅致の女なり和歌を善くす和泉守橘道貞に嫁して女小式部を生む道貞歿するの後上東門院に仕ふ後再藤原保昌に醜す

○全 保昌

藤原保昌は大納言元方の孫なり父を致忠と曰ふ右馬權頭たり保昌人となり瞻智勇決にして侍力人に過ぎ武藝に精達す甥源賴信等と名を齊う

す兼ねて和歌を善くす左馬頭となり丹後大和攝津等の守を歴任し四位に至る長元九年卒す年七十九

○全

定頼中納言

定頼は大納言公任

の子なり姿儀美に和歌を善くす兼ねて書に工みなり寛弘中侍從右近衛少將を歴て長和三年右中辨兼中宮權亮と爲る寛仁元年正四位下に叙せられ藏人頭に補せらる四年

も存じませんといひて、和琴を調べられぬ由を巧に述べたるなり。○全 伏見修理大夫俊綱 藤原俊綱は、關白頼通の子、師實の

弟なり、其の母娠するに當り、出でて讚岐守橘俊遠に嫁す。故に姓橘氏を冒す。後頼通收めて子と爲す。時人俊綱の直衣を着るを見れば、呼びて橘直衣と曰ふ。蓋し、俊綱の姓を改むるを謂ふなり。尾張守修理大夫に任せられ、伏見の里に居る。因りて、伏見修理と稱す。嘉保元年卒す。年六十七。○全 中門 六の巻 八水

や空うらや水とも云云 水か空であるか、空が水であるか、一向わかりませむ。秋の夜の月が空にも水にも共に加よひて、澄み

渡り居れば也。○三八 花園左大臣家 源有仁のことなり。後三條院の皇孫、輔仁親王の子。元久二年八月、姓源を賜ひ、同日從三位に叙し、

右中將に任せらる。保延二年十二月、左大臣に任せられ、左大將を兼ねぬ。久安三年二月薨す。年四十五。花園の大臣と稱す。○全 名簿 ミヤウツ、名札の意也。已の名

を物に書き付けたる者にして、古貴人へ見え、又師の門に入り、又他に屈從する時などに、證として送る者なり。○三八 下格子 ゲカウシ、格子は釣り上

げてある者故しむるこ。○全 青柳のみどりの糸を云云 糸も、繰るも、綜るも、皆機を織

る縁語なれば、春の柳の糸よりはじめて、夏を経るに、夏の間糸を綜るにかけ、秋に至りてはたふり虫がなくと巧にとりなせる歌なり。○全 萩おりた

る御直垂

直垂、ひかしは庶人の服なりしが、後には禮服となれり。袖括あり、胸紐菊綴、皆組緒なり。裾は袴の内に入るゝなり。萩の模様を織り出したる直垂

なり。○全 春かすみかすみていにし云云 この歌、草紙には、別恒が子を竹臺の許に召出で、よませ

られたる歌とし、古今集には、讀人知らず、題しらすとして載せたり。一首の意は、春の霞の内、霞みて去にし、雁かねは、今ぞこの秋霧の上になく、なると打驚けるに、其かすみてい

にし、春の面影のなつかしう霧。○四 今日來ずば 古今集春部に、業平の朝臣、今の上に思ひ出でらるゝとなり。○三 義山が殺風景 日來ずば、明日は雪とぞ降り

なまし、消えずはありども。○全 登然 キヨウゼン、人の足音の形容。○四 義山が殺風景 花と見ましや、とある歌也。○四 義山が殺風景 李義山名は商隱、玉溪生と號す。義山はその字、懷州の人なり。唐の文宗開成二年の

の譏 進士にして、有名の詩人なり。義山雜纂といふ書に、殺風景なる者をあげたり。今春の花に對して、秋の紅葉を賞するは、義

山に殺風景として、譏らるゝべけれど。○四 山有木工則度之云云 左傳云、隱公十一年、春、滕侯、薛侯來朝、爭長。公使羽父請于薛侯曰、周諺有之曰、山有木工、則度之。實有禮主、則擇之。周之宗盟、異姓爲後。寡人若朝于薛、不敢與諸任齒。○四 大

津宮御宇云云 大津宮御宇は、天智天皇の御代、萬葉一の卷に、天皇詔、內大臣藤原朝臣、鏡、憐、春山、萬花之艶、秋山、千葉之彩、時、額田王、以歌判之歌、冬

もり春さり来れば、なかさりし鳥も来鳴さぬ、咲かさりし花も咲けれど、山をしみ入りて
もどらす草ふかみどりても見ず、秋山の木の葉を見ては、もみづをは、どりてぞしぬふ、青
きをは、おきてぞなげく、そこしお
もしろ、秋山われは、（さ）ある御歌也。○四一
大伴黒主 世世近江大友に居る、よりて
氏とす。貞観より、延喜年中ま

で在世せり。和歌に巧なり。後人詞を
建て、以て祀り、黒主明神と稱す。○全

全

錦をはれる秋はまされり 萬

代匠記に、樹下集を引きて、春はた、花こそは散
れ、野邊ことに錦をはれる、秋はまされり（さ）あり、○八
浅みどり花も云云 新

今集春部に、祐子内親王藤壺に住み侍りけるに、女房うへ人なごさるべきかざり物語し
て、春秋のあはれ、いづれか心ひくなご争ひ侍りけるに、人々多く秋に心をよせ侍りければ
菅原孝標女、浅みどり花もひとつに霞み。○全
秋は夕と 新古今集秋の部に、崇
徳院に百首歌奉りけ

つ、嘘に見ゆる、春の夜の月とある歌也。○一一
秋は夕と 新古今集秋の部に、崇
徳院に百首歌奉りけ

る時、藤原清輔朝臣、うす霧の、薙の花の朝しめ。○四一
詔と武 詔は帝舜の徳をたし
へたる詩にして、武は

周の武王の徳を。○四三
すさまじき氣 荒涼
の氣 ○全
慄慄 リツリツ、
懐憤の貌 ○四五

離婁か明目 離婁は、古の明目なる者、孟子に離婁の明の語ある
を見れば、支那上古の人なれども、其の傳詳ならず。 ○四六
源頼

義 頼義は頼信の子、頼信の父は満仲、満仲の父は經基、經基は即 全 貞任宗任 陸奥

の囚安倍頼時の子、後、貞任は頼義・義家に 全 軍のをの 軍する武士 ○七

衣のたては、ほころひにけり 衣川館は、貞任等の立てこもりし館なり、そ
の破れたるを衣のたての糸は、ほころびた

りとは、よみ かけしなり。 ○一一
くつばみに くつわ ○一〇
年を経し、糸のみたれ の破れたるを衣のたての糸は、ほころびた

のくるしさに 糸のみたれに、戦亂の意をかけて、年月をわたる、戦の
苦しさに堪へずして、衣の館は、ほころびたりとなり。 ○四八
宇

治殿 藤原道長の一男、頼通、宇治に退隠せ 全 ことをの給ふ人かな 不
思

ることをの給ふ人かな 大江匡房、大宰帥なり。 ○四八
永保合戦 寛治
二年

より、同五年まで、前後三年、源義家の清原真衡を助けて、清原の家 四九 からめ手

から 五二 後徳大寺左大將實定 右大臣藤原公
能の子皇太皇

后多子の御兄也。人ど爲り、穎敏にして、才學あり、和歌を善くす。官左大臣に至る。建久二年薨す。年五十三。○五四 舊都 京都を指す、この時平清盛都を福原に移したるをもて、舊都と稱せる也。○全 入道 平清盛入道。○全 數奇 風流なり。○全 雀の松原 津

名所圖繪に、五百崎の東にあり、一説に、涼の松原といふ、貞松といふ者の狂歌あり。千代千代と、なげきも鶴の聲でなし、すゝめ松原百になるまで。○全 星か河

げの松 津國菟原郡、御影村の濱松をいふ。續古今集に、基俊朝臣、世にあらば、又かへり來む津の國の御影の松よ、面かはりすな。○全

邊の 伊勢物語に、はるゝ夜の、ほしか川邊の螢。○五五 いなの湊 昔、大物の浦よ、かもし照るや、なにはの浦に見渡せば、夕日かくるゝ、こやの松原、なごあり。○全 水無瀬川 廣瀬村にあり、昔は關戸院を

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

松の松、風、なごよめり。○上 二の松 昆陽野は、昆陽莊といひて、十四ヶ村あり。京都より、山陽道の往還なり。夫木集に、仲業の歌に、おし照るや、なにはの浦に見渡せば、夕日かくるゝ、こやの松原、なごあり。○全

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

今、此の川を城攝の界とするよ。○五五 大宮御所 大宮は、皇太后多子、名所圖繪に見えたり。下流は淀川に入る。○一〇

女宇治左大臣頼長の養子、御所は鷹司の下、近衛通の東河原なり。○全 待宵の小侍従 姓は紀氏、石清水別當光

に仕ふ。待宵といふ名は、ある時、御前より、待宵、歸るあした何れかあはれまさる、と仰せければ、よめる「まつよひに、ふけゆくかねの、こゑきけば、わかぬわかれの、とりはものかは」とよめるより、かへる名なり。○五五 二代の后 初、近衛天皇の皇后となり、後、又、二

條天皇の后となり、給へるをいふ。○七 垣衣 白氏文集に、答夢得秋庭、獨坐見贈と題して、林梢隱映夕陽殘、庭際蕭疎、夜氣寒、霜草欲枯、蟲思急、風枝未定、鳥棲難

容衰、見鏡同惆悵、身健逢盃且喜歡、應是天教相暖熱、一時垂老與閑宮。○全 居待 陰曆十日あり、夢得は、劉禹錫の字、有名の詩人にして、白樂天の友人なり。○三

夜の月 ○全 源氏の宇治巻 橋姫の巻にあり、八の宮の姫宮の御事なり。○一 大床 おほゆかは、なれども、武士の家居にては、○五八 あたりを拂ひて見え給ふ 氣高き

廣廂といはず、大床といへり。○一 入道 平清盛入道。○全 見參 ケンザン、か目にかいりて。○六〇 砌下 の、たぐひな。○五九 入道 平清盛入道。○全 見參 ケンザン、か目にかいりて。○六〇 砌下

の、たぐひな。○五九 入道 平清盛入道。○全 見參 ケンザン、か目にかいりて。○六〇 砌下

の、たぐひな。○五九 入道 平清盛入道。○全 見參 ケンザン、か目にかいりて。○六〇 砌下

の、たぐひな。○五九 入道 平清盛入道。○全 見參 ケンザン、か目にかいりて。○六〇 砌下

の、たぐひな。○五九 入道 平清盛入道。○全 見參 ケンザン、か目にかいりて。○六〇 砌下

はする處を引 ○六一 前途程遠 これは後江相公が鴻臚館の客に送りし詞なり

合といふなり ○七 和漢朗詠集八の卷に於鴻臚館餞北客序とあり

鴻臚館は羅城門の傍にありて異朝の人の來れる時ここに舍するなり朗詠集解に北

客とは渤海の周文徳と云ふ人なり唐使として本朝に來り還りける時江の朝綱卿の餞

別の序なり上の句前途とは行先の道なり雁山とは西都賦に云ふ地接雁門云云都より

胡の地へ通ふ道に雁門とてあるなり山高うして胡國へ歸る雁の越えわづらふ處を通

すべきために山の峰をさき開きたる處を雁門といふなり周文徳はるかに此の國を去

らんとする故にかく作れり下の句は後に參命を別せんこといつともなければ落涙お

さへがたしといふなり櫻は冠のひもなりとあり忠度の二の句を吟じたる ○六二

も俊成卿に別を惜み再會期しがたき心なり後江相公とは大江朝綱なり ○九

さなみや志賀の都云云 さいなみは枕詞志賀の都は天智天皇の都したま

高市古人等の歌に見ゆながら山は志賀の舊都の近傍にゐる山なりさて一首の意は志

賀の都はわれはてたれと昔のどほりに長良山の山櫻は咲きたるかなとてはかなしと

いふ花は昔のまゝにして繁昌せし都 ○六四 蜘蛛のいに 蜘蛛の糸 ○六五 土の

の早く荒廢に歸せしを嘆じたるなり ○五 庭漑 ニハタツミとよ ○六八 なみ

にほひ來る 土の雨にしめりゆ ○六六 庭漑 水たまりなり ○六一 なみ

見れば 數へ見 ○六九 あふささるる 合ふさ離る ○七二 いさばす

叱り戒しめ ○七三 神のいさむる いさむるは ○七四 佐保姫 春を司

ずといふ意 ○七五 入にし人の跡をもまぬび 源義經の吉野山に入りしを慕ひて其の

りにし人のあどぞこひし 源義經の吉野山に入りしを慕ひて其の

きと詠せしをいへるなり ○全 益荒雄が君の御楯 元弘三年後醍醐天

籠らせ給へる吉野の城へ北條方の二階堂山羽入道道攻め寄せて宮既に危く見えさ

せ給ひし時侍臣村上彦四郎義光いつはりて宮と稱し自殺して敵を欺き宮を落し参ら

せしを ○都だに淋しかりまを 新葉和歌集夏の部に吉野の行宮にてうへ

いふ ○七七 ついちのおほひの下 ついち柱を立て板を添へ泥土に

とがれて打ひしがれることにて、おしつぷされたるをいふ。○七八 一日まぜ一日 ○四大種

地水火風なり。昔は萬物皆この四より成れる者と思へり、故に四大種とは呼べるなり。○全 齊衡文徳天皇の御代の年號 ○六 あぢき

なき事世の中の無常にて、つまらぬ事なり。 ○八〇 ともあるもの然るべき者にて、徴兵に應ずる資格を備へたる

者。○全 一〇 ふねとめし湊は川の云云昔船を泊めた湊であるといふことは、湊川と云ふ川の名ばかりに

残りて、今では河原の小石の上を流るる水もなしといふ意なり。○八一 水戸の君徳川光國を指す。 ○全 くすの

きのかれにしあごと云云くすの木は楠正成をいふしるし。石は墓石なり。一首の意は明也。 ○八二 歩

行よりかちよりとは、乗物に乗らずして、歩行にて参詣せしなり。 ○全 極樂寺八幡護國寺別當安宗の開山なり。安宗は行教和尚の弟子

なり。○全 高良玉垂命なり、一説には、武内神なりといへり。 ○全 かばかりと心得て極樂寺高良なさを拜みて、石清水なり

と心得たる也。○全 九 かたへの人にあひて傍の人に逢ひてなり。 ○八三 ほしい意

なり。○八四 ひこの國外國なり。 ○思ひ入りたるさま思ひこむ、沈思の意なり。 ○全

まばゆからず恥し氣もなくなり。 ○八五 すぢりたる身体を曲げくねらするを云ふ。 ○八五

のり合ひののしりあひなり。 ○全 えもいはぬ事こともまぢらし 酔ひてはきなどす

るなり。○八六 かばゆし可愛相といふ意。 ○八七 桑蠶は苦しく、女工は難志

この銘は、周の武王の作にして、文體明辨に載せたる原文には、桑蠶苦、女工難、得新捐、故後必寒とあり。桑蠶は養蠶なり、女工は糸を績ぎ、機を織り、衣服を裁ち縫ふことなり。蠶を養ふは、まことに困難なる仕事にして、又糸を探り、機を織りて、衣服に供するは、實に骨の折るゝわざなり。されば、新しき衣服が出来たりとて、前よりあるふる方の衣服を捨てたならば、後に必寒き思をせねばならぬ、といふ意なり。○昨日城墪に至り云云宋の張俞の詩 ○八八 禾を

くさぎれば云云一の巻に出づ ○八九 五の道人倫五常の道 ○全 過差おと ○九一

おなじ湊土佐國の大湊なり。 ○九一 青馬を思へどいごかひなし公事根元に、一

月七日は、白馬の節會、又青馬の節會といふ。その故は、馬は陽の獸なり、青は春の色なり。これによりて、正月七日に、青馬を見れば、年中の邪氣を除くといふ。本文侍るなり、又馬は白馬を用ゐらるる例なりとあり。さて、今日は、青馬の節會ゆゑ、白馬を見たとしと思へど、舟の中なれば、見る事が出来ぬといへるなり。 ○ 九 長櫃 櫃の形長き者なり。

○ 全 雉など花につけたり 花は造花なり、伊勢物語に、昔、太政大臣と聞ゆるおはしまじけり。仕う奉る男、九月ばかりに、梅の造枝に、雉をつけて奉るとて、我たのむ君がためにと、折る花は、時しもわかぬものには、ずありける。とあり。されば、これも、矢張、梅のつくり枝なるべし。 ○ 九二

よき人の男につききて 身分よき女の 身に從ひて也。 ○ 九二 破籠 食物を入るる器にして、中に隔あり。今の辨當の如き。 ○ 九三

これをのみいたがり云々 これは表面には、ゆく先に立つ、白波の聲よりも、云々の歌のみをほめてあれど、内心あまり拙きをわざけりて、誰も返歌もせざるなり。 ○ 全 まからず 参上いたしましやうといふ、田舎言葉なり。 ○

七 まる 昔は男女ともに、自分立ちてゆく人も、とどまりて見送る人も、別を惜みて、袖に涙が流れて、川の如くなるによりて、そばに居る人まで、貫ひ泣をして、袖がぬれまさらるとなり。 ○ おむ

○ 八 てる月のながるる見れば 照る月の流れる

な 嫗なり、女どまがふべからず、女のかなは、をみななり。 ○ 八

て海へ入るのを見ると、天の川も、矢張、地球上の川と同じく、海に入るに、ぞありけるとなり。 ○ 九五 および 指なり。 ○ 九五 うま

のはなむけ 旅立つ人を送り、その馬の鼻へ向けて、物を贈ることより、轉じて、馬に向はすでも、旅行の人に贈る品物、又、送別の詩歌などをも、しかいへり。

○ 九六 青海原ふりさげ見れば この歌、古今集、羈旅の部には、初句、あまの

せば、面白く月か出てあり、この月は、我が幼少の時、奈良の都の三笠山より、出でたる月と、同じ月なるが、この年頃、久しく唐にすみたる時、常月を見たれども、この様には、思はずりしに、この度、久々にて、故郷の日本へ歸らんと、思ひ立ちたる故にや、この明州の海上へ出る月を見れば、三笠山へ出でたる月の事が、思ひ出さるといふ意なり。 ○

九六 おほるげの願 一通りなり。 ○ 七 をここ文字 漢字の事なり。 ○ 一 かへ

らや 歌の拍子なり。 ○ 九八 物言ふやうにぞきこえたる 詩か、歌でもいふ様にきこえました

○ 九八 海賊むくいせむといふ 其之土佐にありし時、海賊を追捕したることを、其の海路にあるを幸

九十一

として復讐せんとす、
といふ噂ある上に。 ○九 わががかみの雪と磯邊の去ら波と云々

波路の難儀なると、海賊のおそろしさに、髪は皆白髪になりたるが、我
髪と磯邊によする白波と、いづれか白き沖つ島守よ、判断せよとなり。 ○九 九 品お

こりて、
品が劣りたることに。 ○九 九 祭のかへさに 賀茂の祭の 全あ
て、下品のことなり。 六 九 九 歸りがけに。 ○上あ

やしの家 つまらぬ 人の家。 ○全 おどろなる垣根 おどろは榛莽にて、いばらな
どの叢り生ひたる垣根をい

○青朽葉 青色の上に、白を重ねた
る、かさねの色の名なり。 ○七 一〇〇 あいなく 愛らし
げなく。 ○全 一〇

をかしきにほひこそ、心もさなく、つきたんめれ 愛すべき色
が、心もどな

くばんやりとつき 一〇〇 梨花一枝云云 自樂天の長恨歌の一節に、風吹仙
袂飄飄翠猶似霓裳羽衣舞玉容寂

雨とある所の句なり。 ○五 一〇一 ことごとまき名つきたる鳥 鳳凰
のこ

り。 ○九 一〇一 かれ花に、さまこととに咲きて 花のこまかに、
幽なること也。 ○一〇二

身をまもる云云 春葉集にあり。一身を修めまもる、心の關のしつかりとして、悪
しき思をして、越えしむることだに、なくば、世の中に、禍といふ

者が、いかで出で来らん ○五 全 子をおもふ 三草集にあり。一首の意は、子を思ふ心
ほと、深き心はなき者なれば、その深く

我をいつくしみ給ふ親には、われも亦我子を愛する、厚き心 ○八 全 足乳根の 新後拾
遺集に

を、もて、仕へ奉れかし、世間の人よと、よびかけたる歌なり。 ○全 一 一 かたちこそ 古今集に
あり、一首

あり、足乳根は、乳をもて、足らし育つる意にて、母の枕詞なれども、後には、兩親に通じて用
ゐ、又、直ちに名詞として、父母のことに用ゐたり、ねは美稱なり、一首の意は、父母存生中、訓

誠せられたる言葉は、世にいまさすなりし後に、始 ○全 一 一 かたちこそ 古今集に
あり、一首

めて、たふとく、辱き事が、わかるものなりとなり。 ○全 一 一 かたちこそ 古今集に
あり、一首

の意は、
明なり。 ○一〇三 わりなしや 家集にあり。一首の意は、よしや世の中の人、吾を
人がましき者と云はずとも、吾身自身が、わが身を

思ひ捨て、しまふ、道理あらんや、その様な理は、なきなり、とこま ○全 六 おのが身の
でも、立派なる人と爲らむことを、務むべきなり、といふ意なり。

詞花集にあり、自分の身さへ、自分の思ふ様にならぬのを考へて見たならば、
世の中の事の、我が思ふ様にならぬ道理が、わかるであらふ、といふ意なり。 ○全 九 手

折らしな 家集にあり。一首の意は、我が垣根の梅を、人に折られて、實に惜しきによ
り、人も又惜しと思ふであらふことが、わかりたれば、自分は、決して人の

垣根の梅の花は、手折るまいといふ意にて、怨の心をよめる歌なり。○一〇四 ことの葉の 六帖詠草にあり。多辨を誡めたる歌にて、一首の意は、

○全 最上河 續後撰集にあり。くだすは、貶し悪くする意。いな舟は、稻を積みたる舟なり。古今集卷の二十に「最上川のほればくたるいな舟の、いなにはわらず、この月ばかりとよゆり、最上川は、秋の末より、冬のはじめへかけて、正税の稻を積みたる舟の、多く上り下りするを、上れば下るとよゆり、舟を下すに、人を貶すをかけ、人を悪しざまに、貶しむれば、人を洗むることは出来ずして、却りて我身が、洗みじぶるものなりと、人を誹るを誡しめたる歌なり。○全 竹の 七 根の うけらの花にあり、竹の節の間に、少しの時の間といふを、かけて、初二の句は、ふしの序に用ゐたるなり、一首の意は、明けし。

女子國文讀本參考書終

女子國文讀本參考書與付

明治三十四年十月廿一日印刷
明治三十四年十月廿八日發行

東京市麴町區永田町二丁目廿九番地

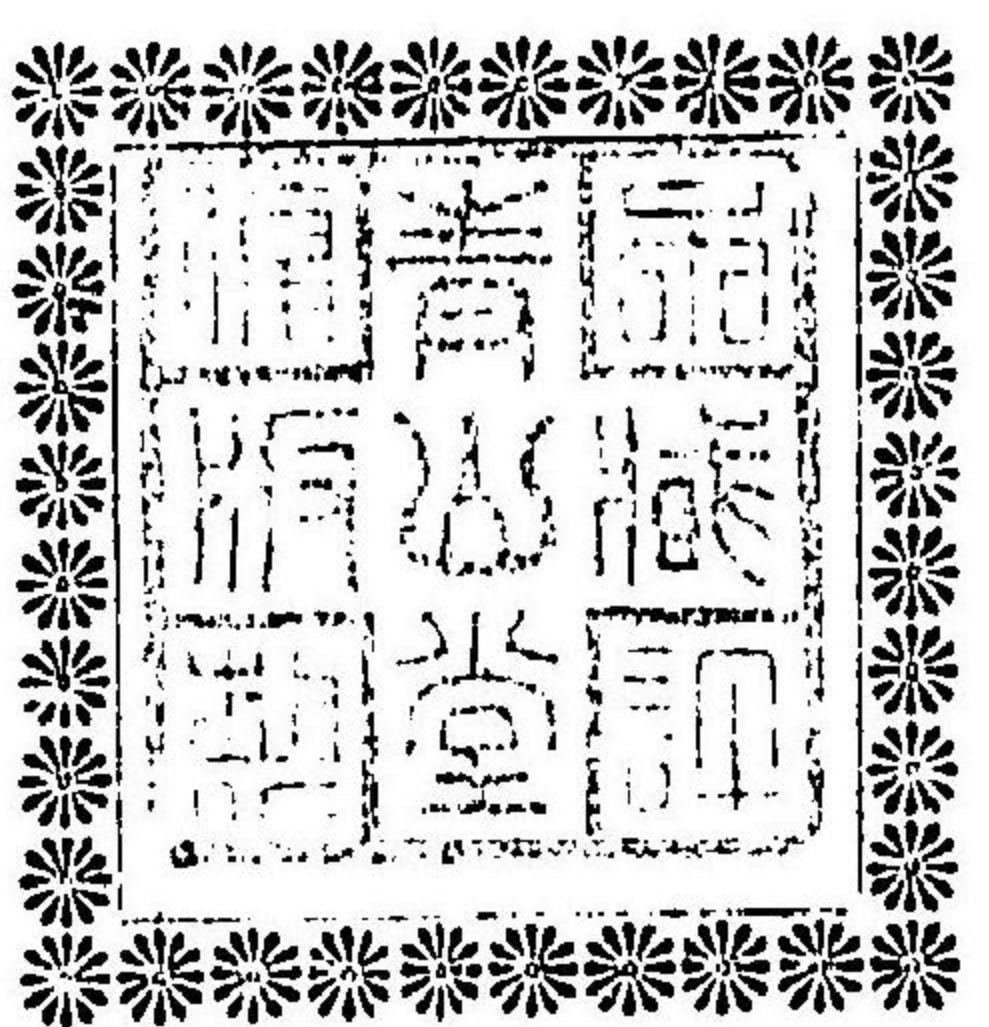
著者 國分美佐子

同 市小石川區大門町二十五番地

兼行兼 印刷者 青山清吉

同 市日本橋區三代町二十二番地

印刷所 明昇舎活版所



關東大賣捌所
同
關西大賣捌所

東京市京橋區南傳馬町一丁目 吉川半七
同 日本橋區通三丁目 林平次郎
大阪府南區心齋橋南一丁目 松村九兵衛

各地賣捌書林

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|------------|--------|---------|---------|-------|-------|---------|---------|----------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|-------|------|-----|
| 大阪備後町 | 京都寺町通 | 奈良縣奈良町 | 神戶市元町通 | 岡山市西大寺町 | 廣島鹽屋町 | 筑前博多町 | 全筑後久留米市 | 熊本市新二丁目 | 熊本市上通二丁目 | 佐賀白山町 | 鹿兒島仲町 | 金澤市尾張町 | 名古屋本町 | | | | | |
| 前川善兵衛 | 松田庄助 | 若林書店 | 辻本支店 | 吉岡支店 | 武内彌三郎 | 積善館支店 | 積善館支店 | 真海書支店 | 菊竹書支店 | 田中幸次郎 | 長崎島次郎 | 河內豐太郎 | 河內幸助 | 吉田幸兵衛 | 紺藤三郎 | 片野東四郎 | | |
| 名古屋本町 | 名古屋三ツ藏町五丁目 | 名古屋鐵砲町 | 靜岡新通一丁目 | 越後長岡 | 全水原 | 全府新瀨 | 甲府柳町 | 長野縣松本 | 長野縣長野市 | 仙臺市大町 | 全海道函館 | 北海八日町 | 山形縣秋田市 | 秋田縣秋田市 | 水戸縣上野市 | 千葉縣千葉 | 全佐原町 | |
| 川瀨代助 | 梶田勘助 | 三輪文次郎 | 坂本屋書店 | 目黒十郎 | 西村六郎 | 櫻井作平 | 櫻井作平 | 柳正堂 | 水正堂 | 西澤喜太郎 | 木村文助 | 藤崎書店 | 魁文書店 | 五文書店 | 成見清兵衛 | 川又銀藏 | 多田支店 | 正文堂 |

